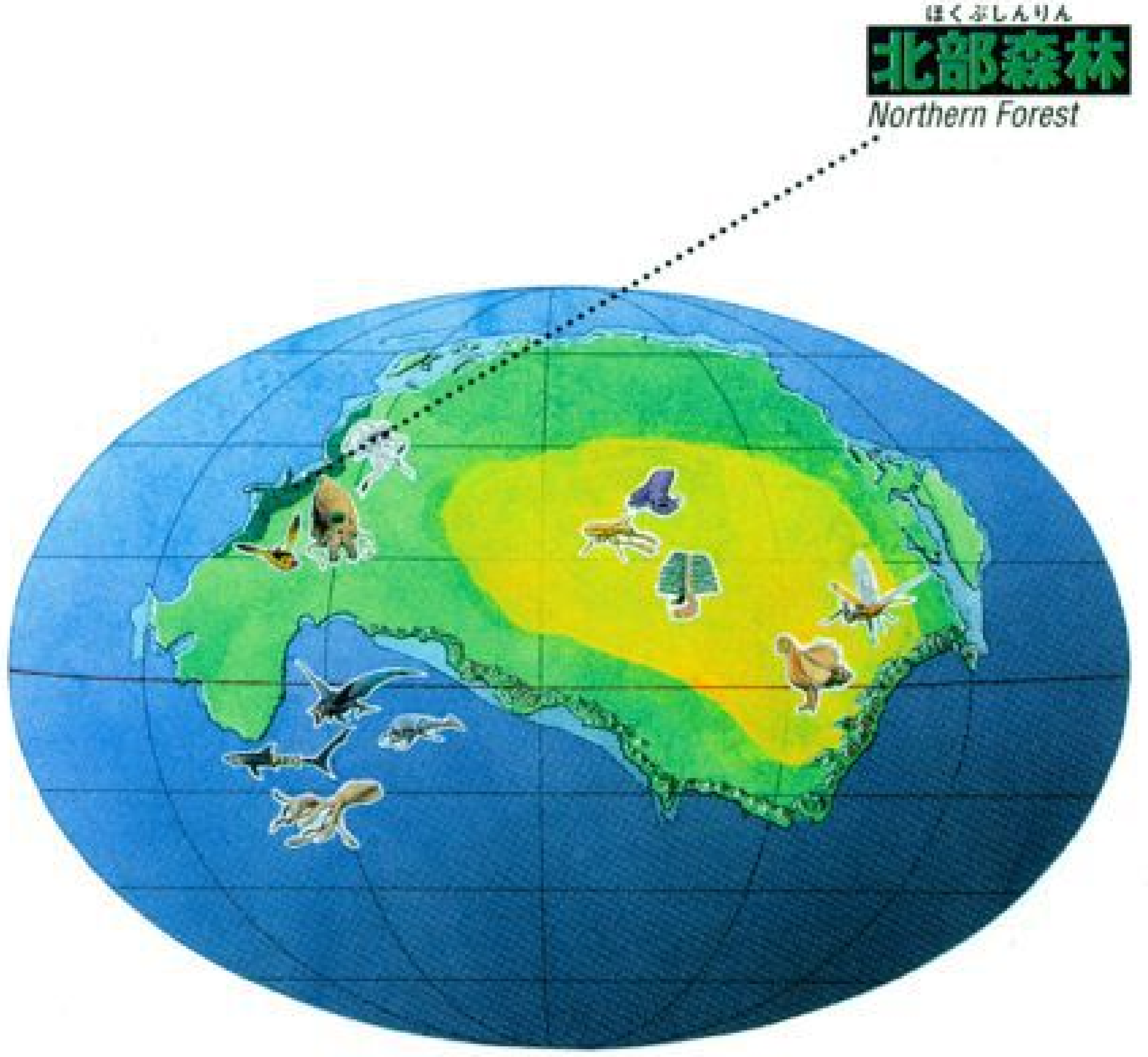
theFUTUREisWILD™

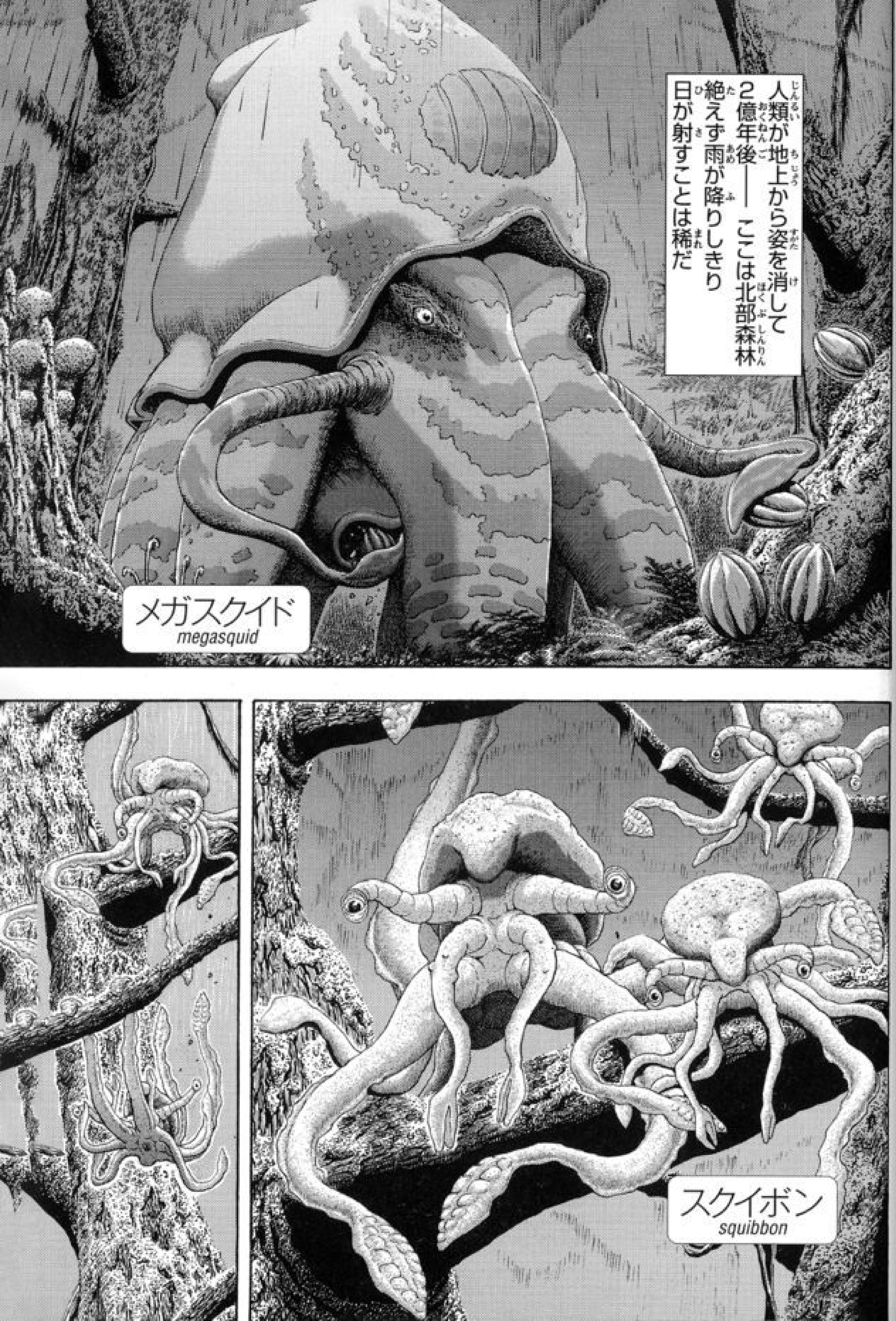
theFUTUREisWILD™

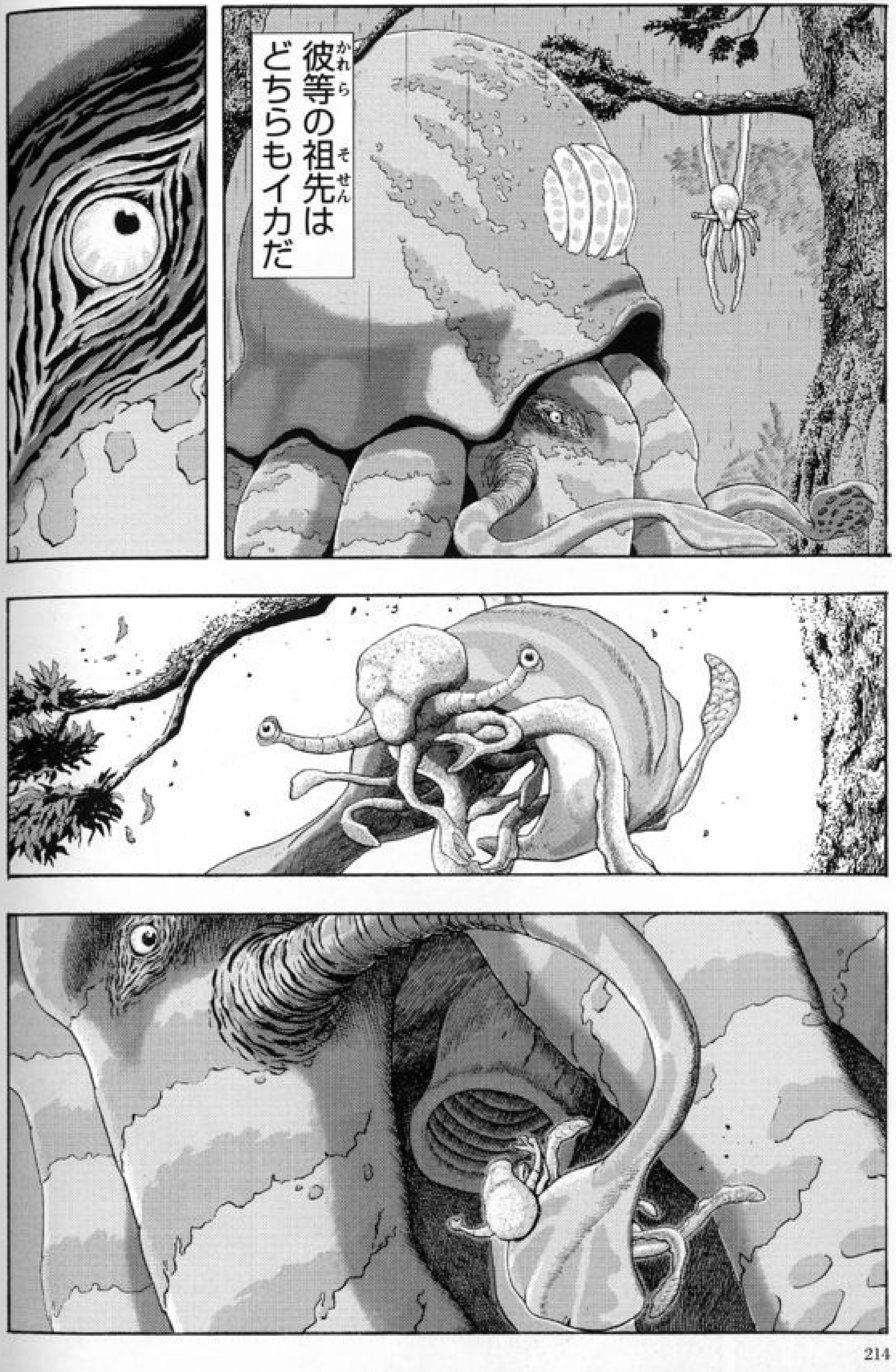
北部森林
Northern Forest



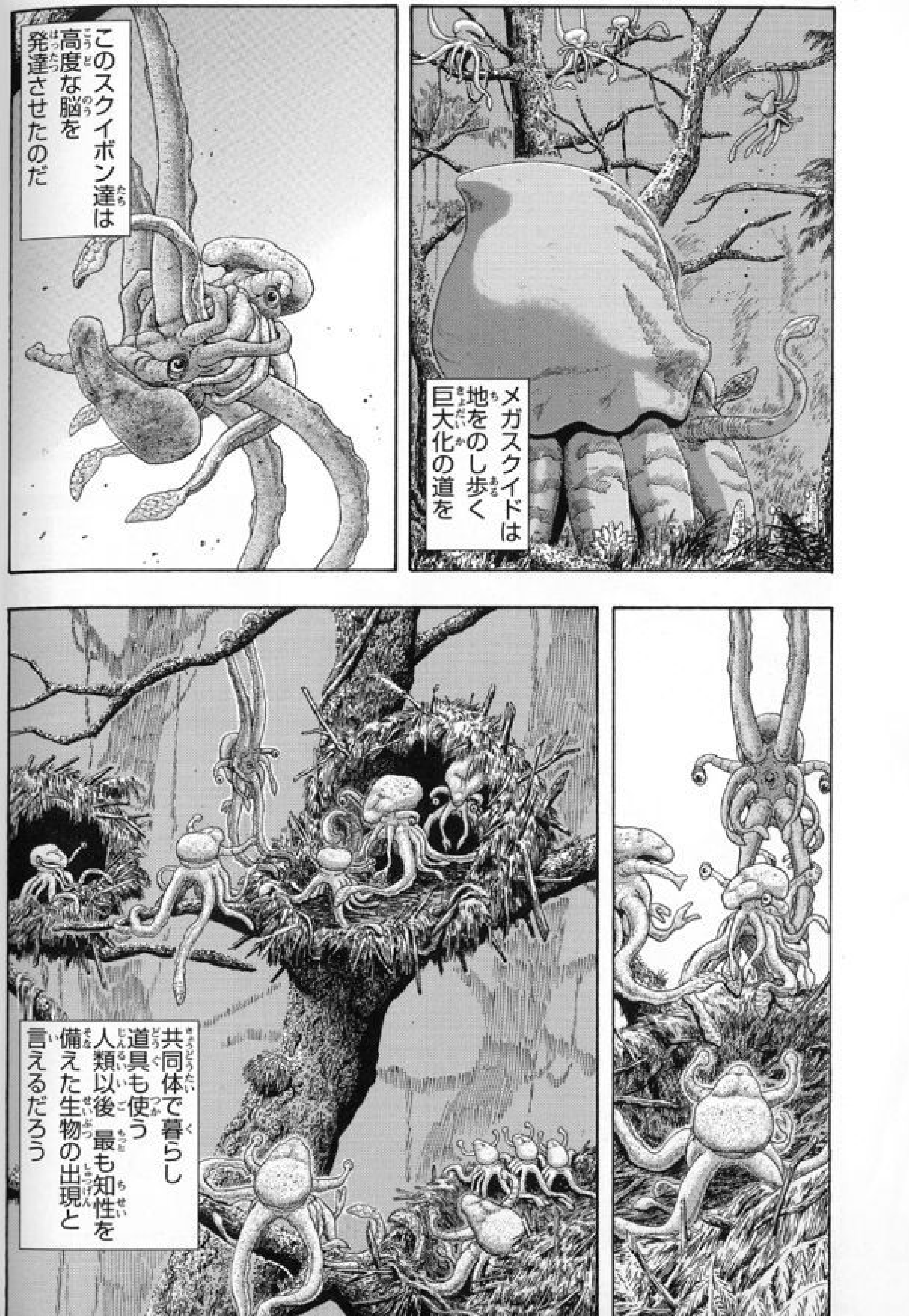
2億年後の世界

におくねんごのせかい

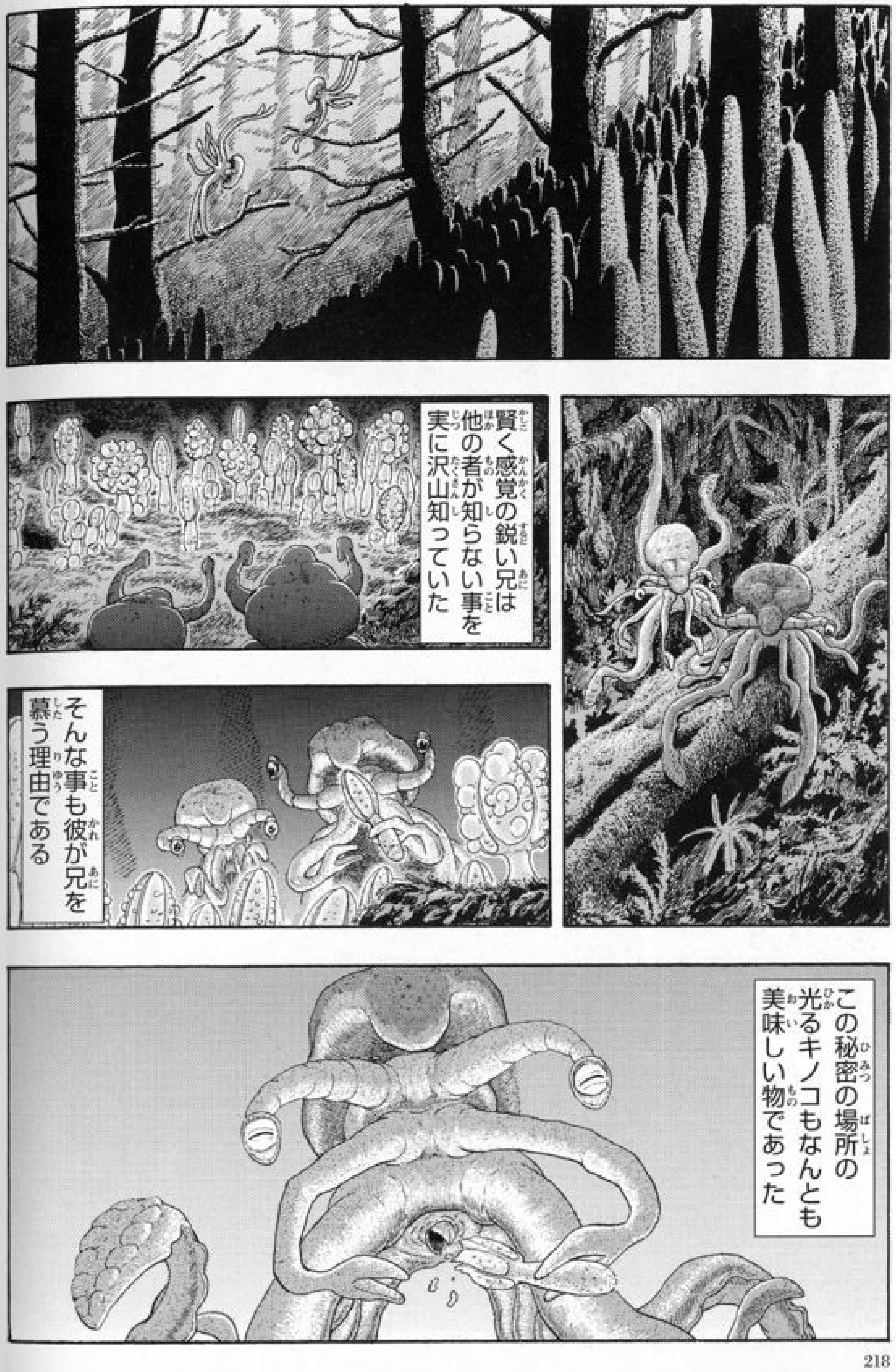


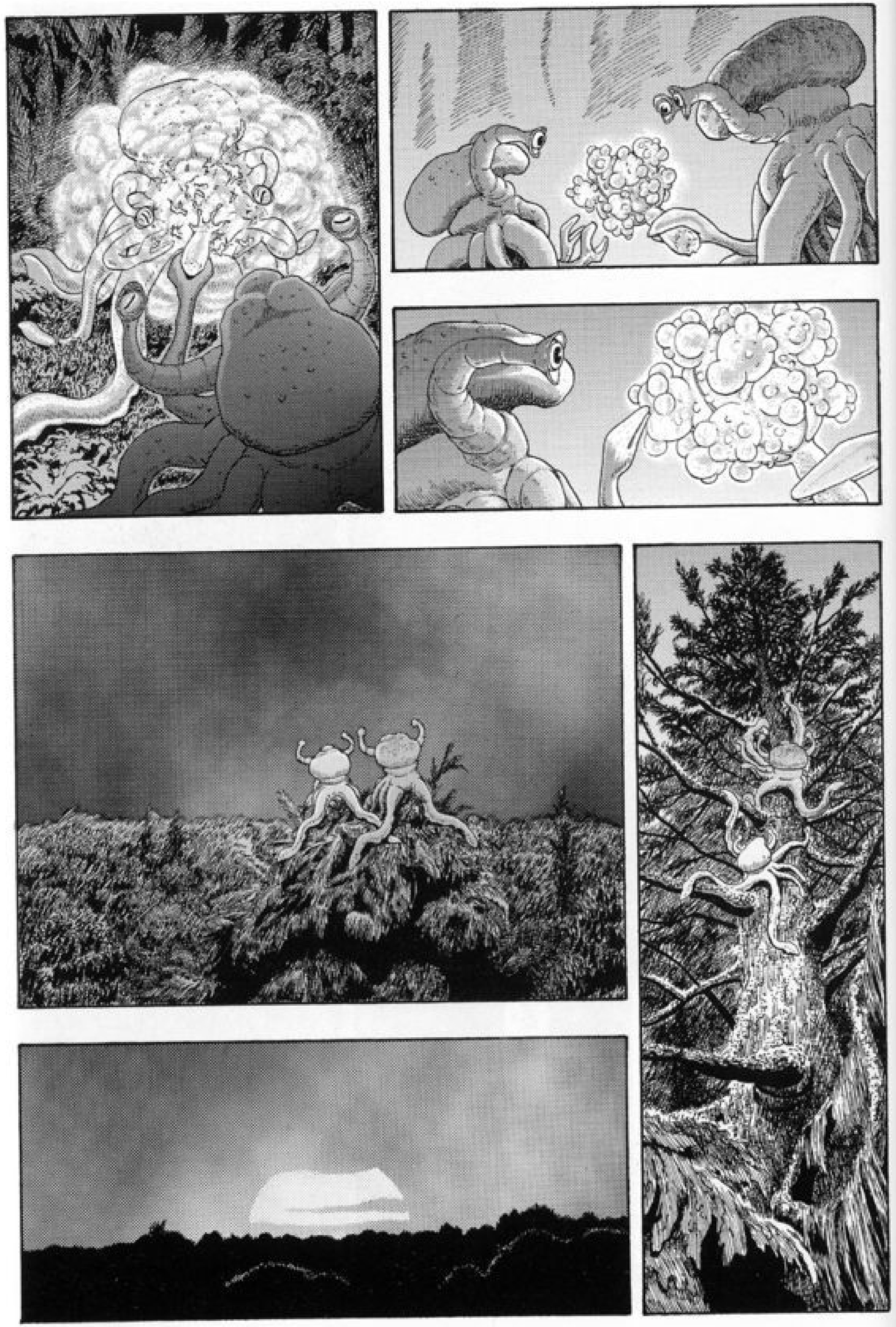

彼等の祖先は
どちらもイカだ

陸生の脊椎動物を
悉く絶やした
一億年前の大量絶滅
その大いなる
生態系の空白が彼等へ
上陸する充分な時間を
与えたのである


メガスクイドは
地をのし歩く
巨大化の道を
このスクイボン達は
高度な脳を
発達させたのだ
共同体で暮らし
道具も使う
人類以後 最も知性を
備えた生物の出現と
言えるだろう

フォレストフリッシュ
forest flish
枝渡りの学習を
兼ねた遊びだ
彼等は
歳の離れた兄弟である
子供の世話は普通
分担するのだが
この子は助けられて以来
えらく兄に懐くようになり
もっぱら一緒に居ることが
多くなっていた


賢く感覚の鋭い兄は
他の者が知らない事を
実に沢山知っていた
そんな事も彼が兄を
慕う理由である
この秘密の場所の
光るキノコもなんとも
美味しい物であった

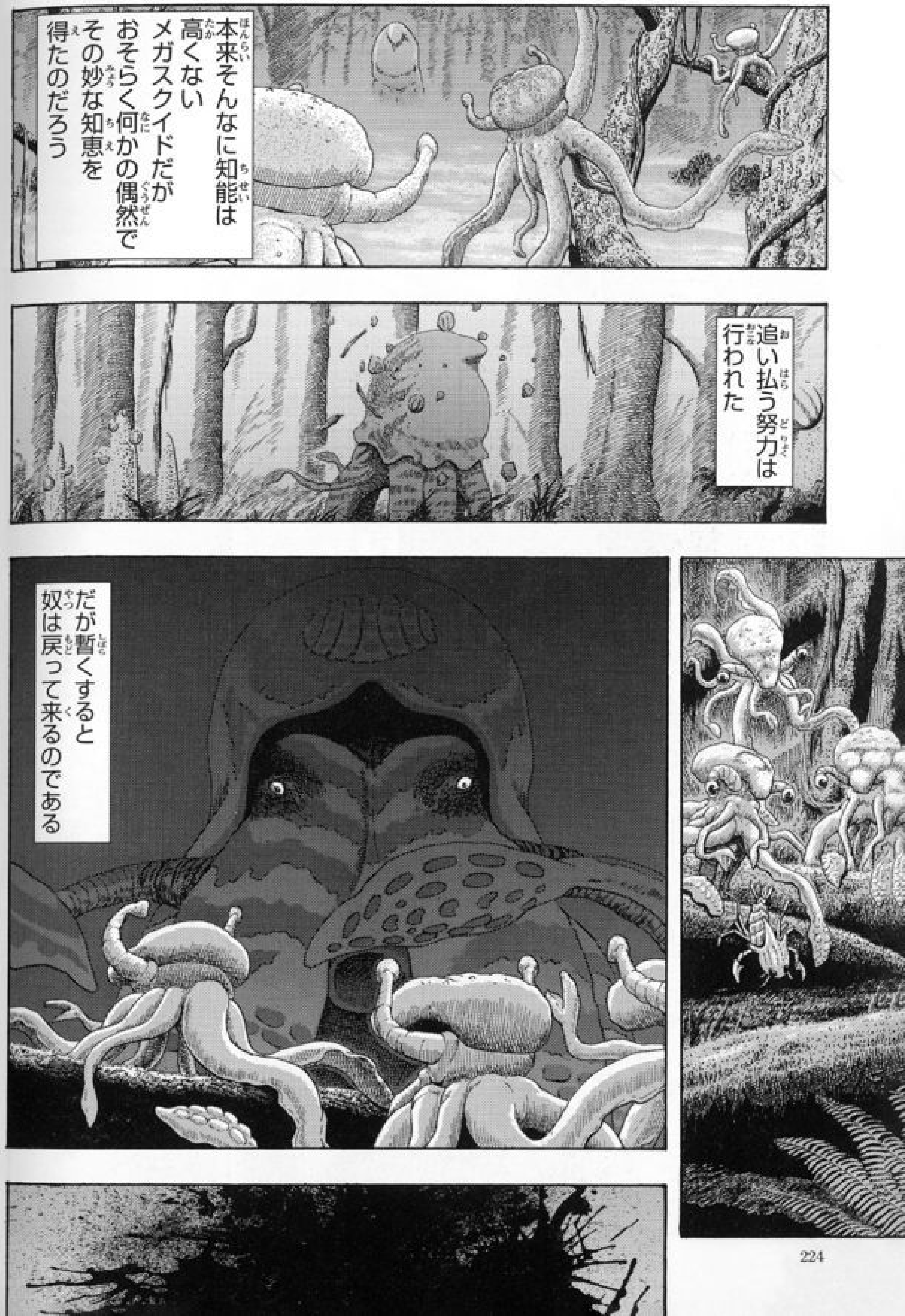


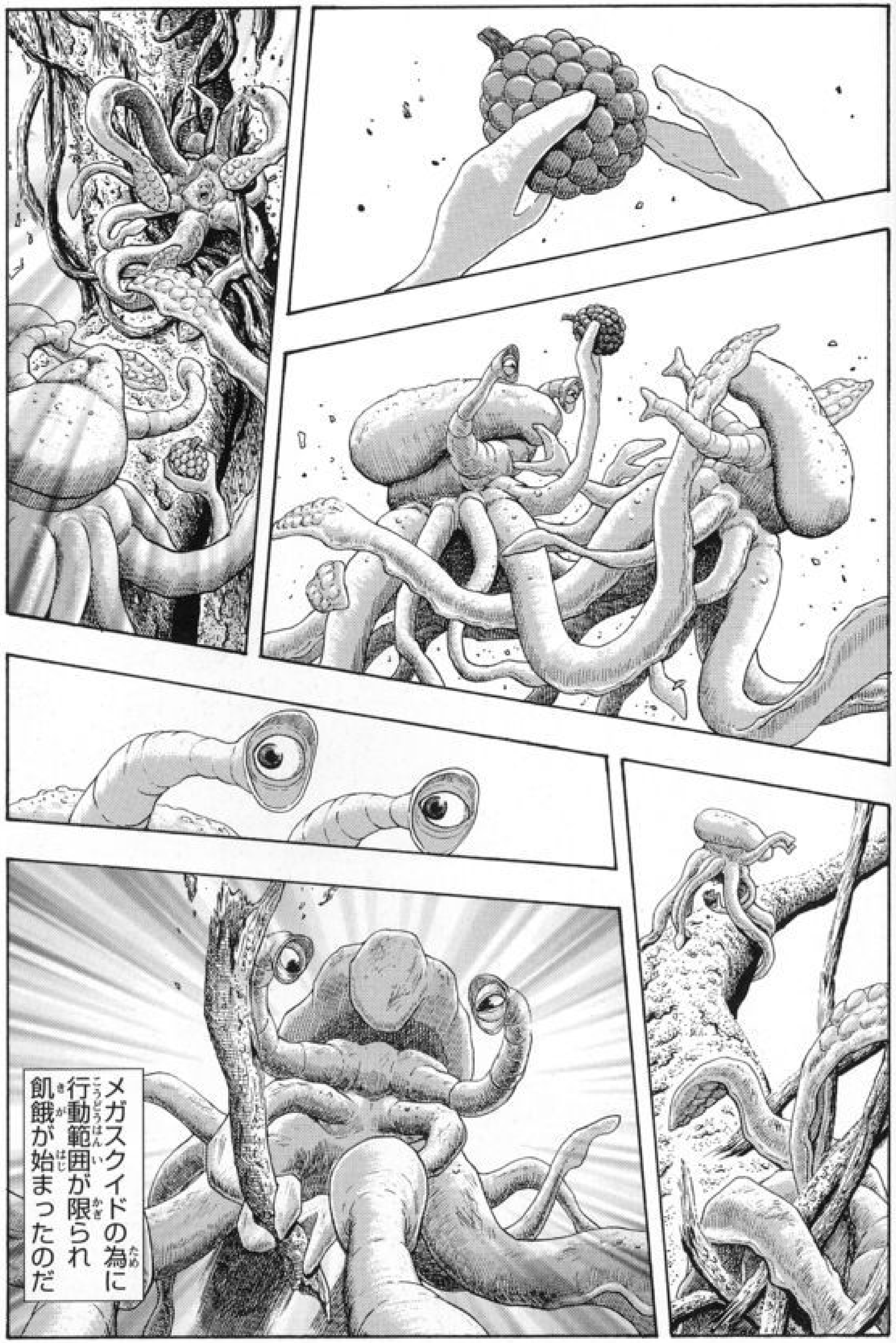
滅多に見られない満天の星
気象を正確に感じての行動だが 弟にとってはまるで兄が不思議な力を持っているかの様であった

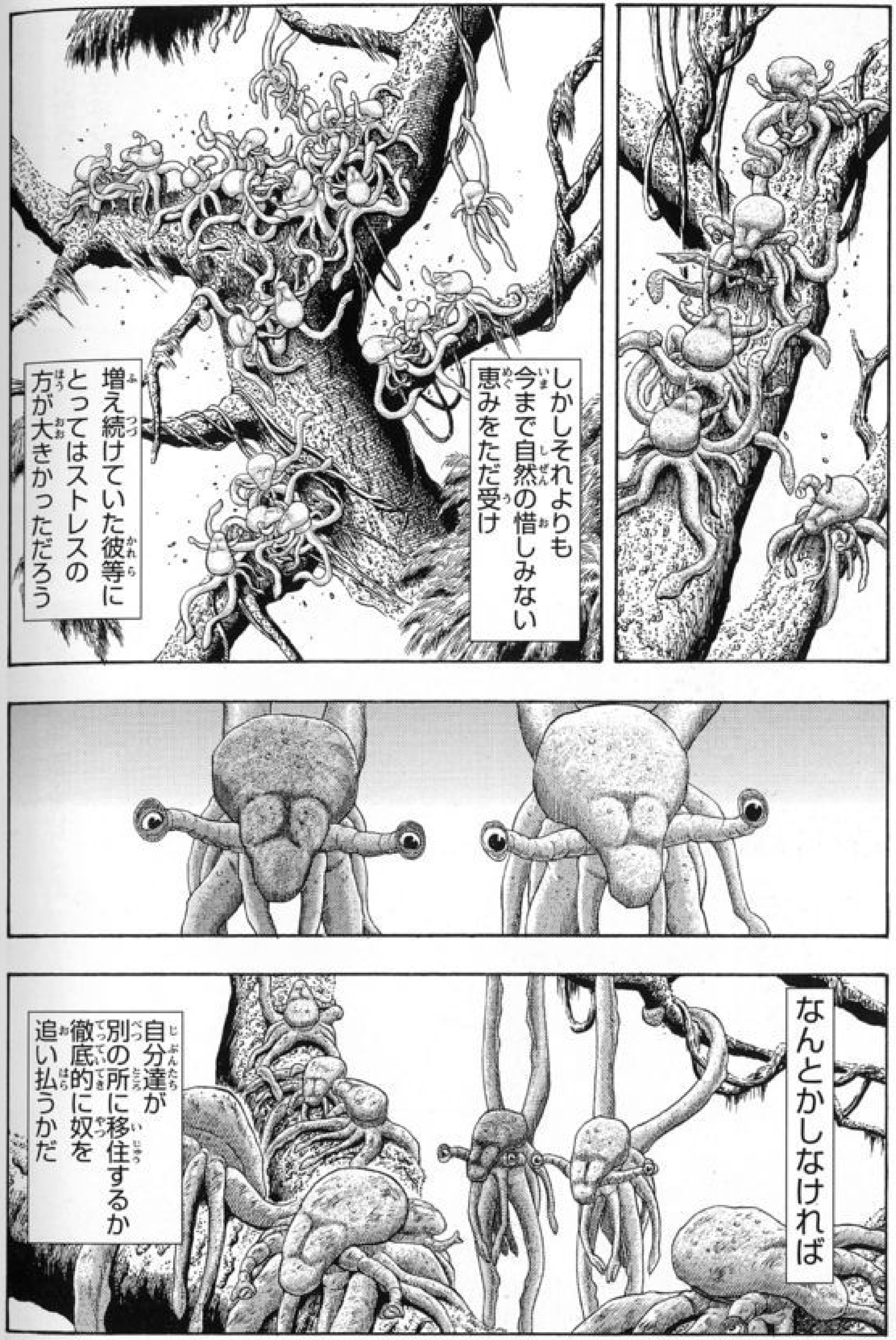
時が経ち 今やあの弟が共同体のリーダーに収まっていた
争ってではなく仲間達は 自然と 立派な体格と 豊かな知性を供えた 彼を選んだのである
もちろん そんな彼が育ったのは 兄あればこそであった
ちなみに 美味しい例のキノコは もう皆の財産になっている

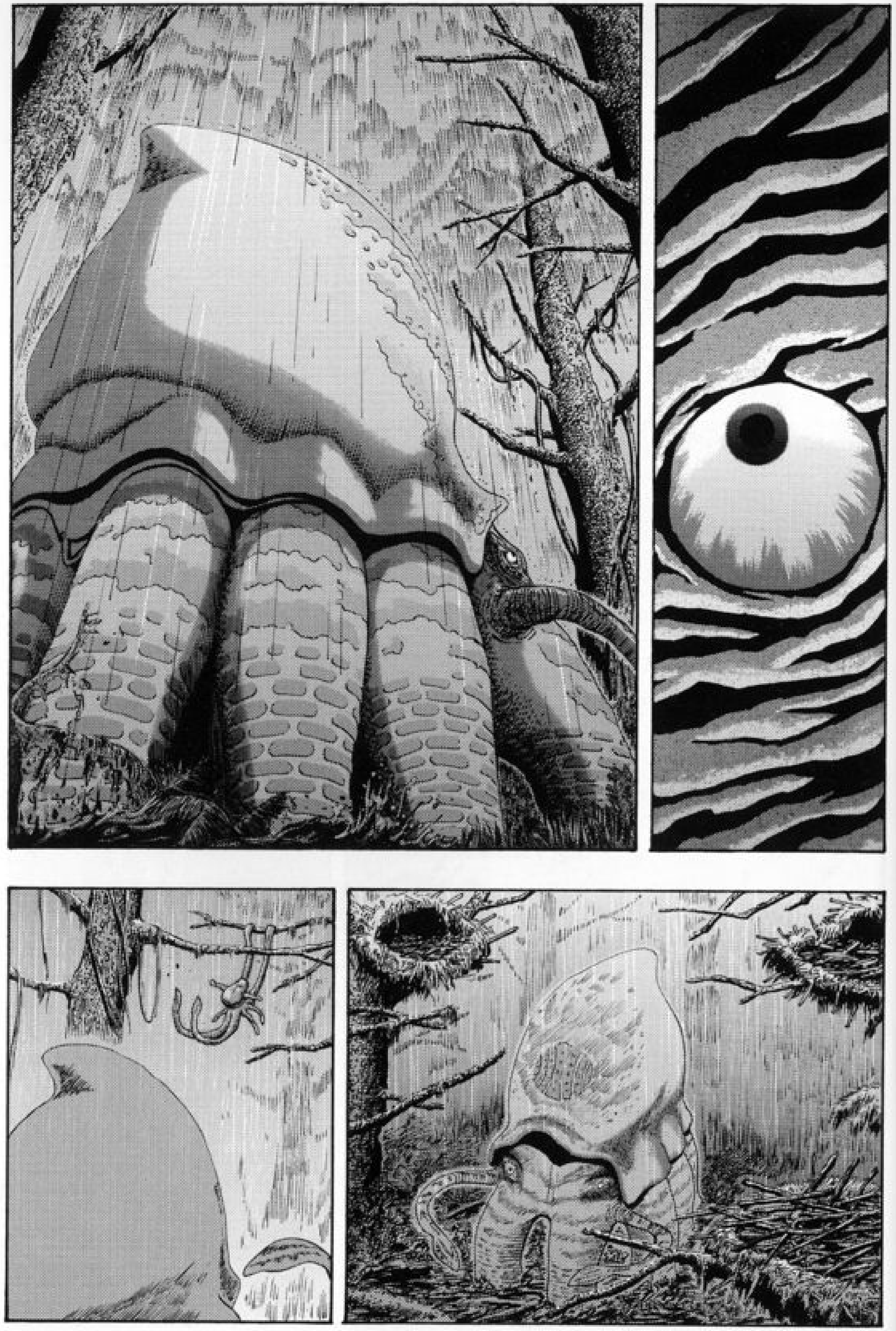
かといってリーダーの
仕事はさほど無い
キノコなどものの一日で
生える豊かなこの地では
もめ事や障害など
皆無に等しいのである
しかし安穏たる
永き暮らしに危険が
迫っていた

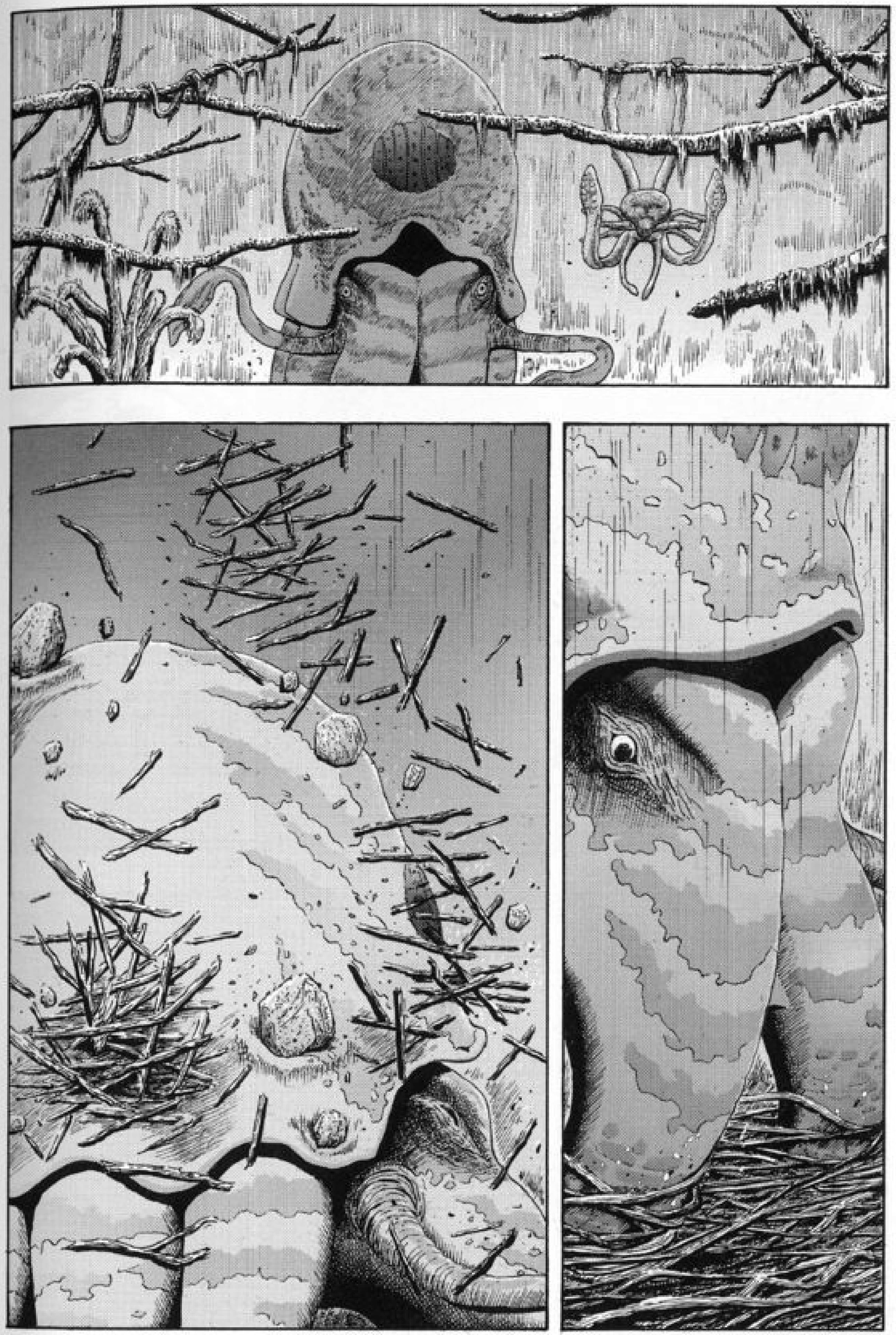
たとえメガスクイドが
近くに居ようと
木の上の方にいれば
絶対に安全であったのに
奴は獲物を振り落とす
技を心得ていたのだ

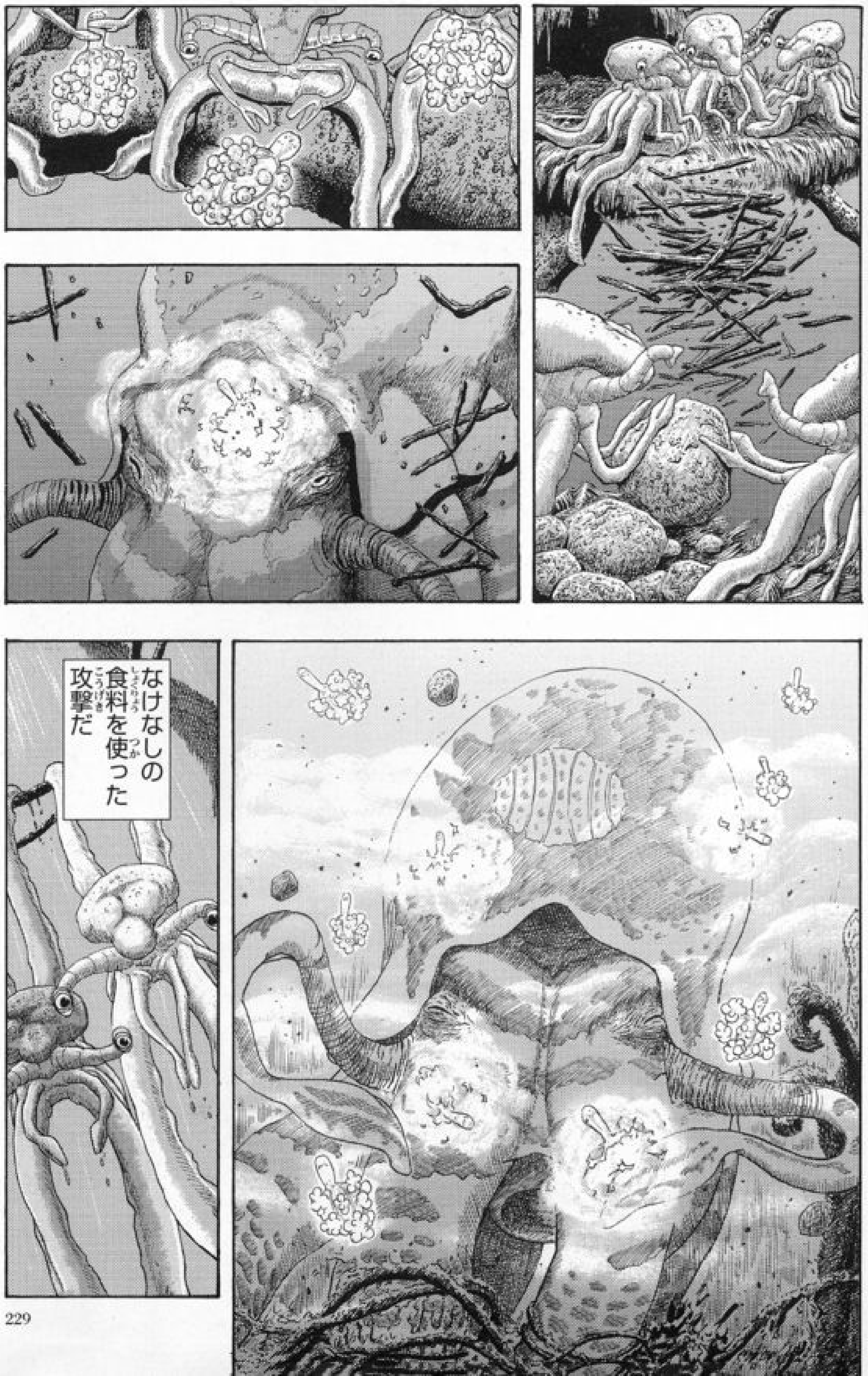

本来そんなに知能は
高くない
メガスクイドだが
おそらく何かの偶然で
その妙な知恵を
得たのだろう
追い払う努力は
行われた
だが暫くすると
奴は戻って来るのである

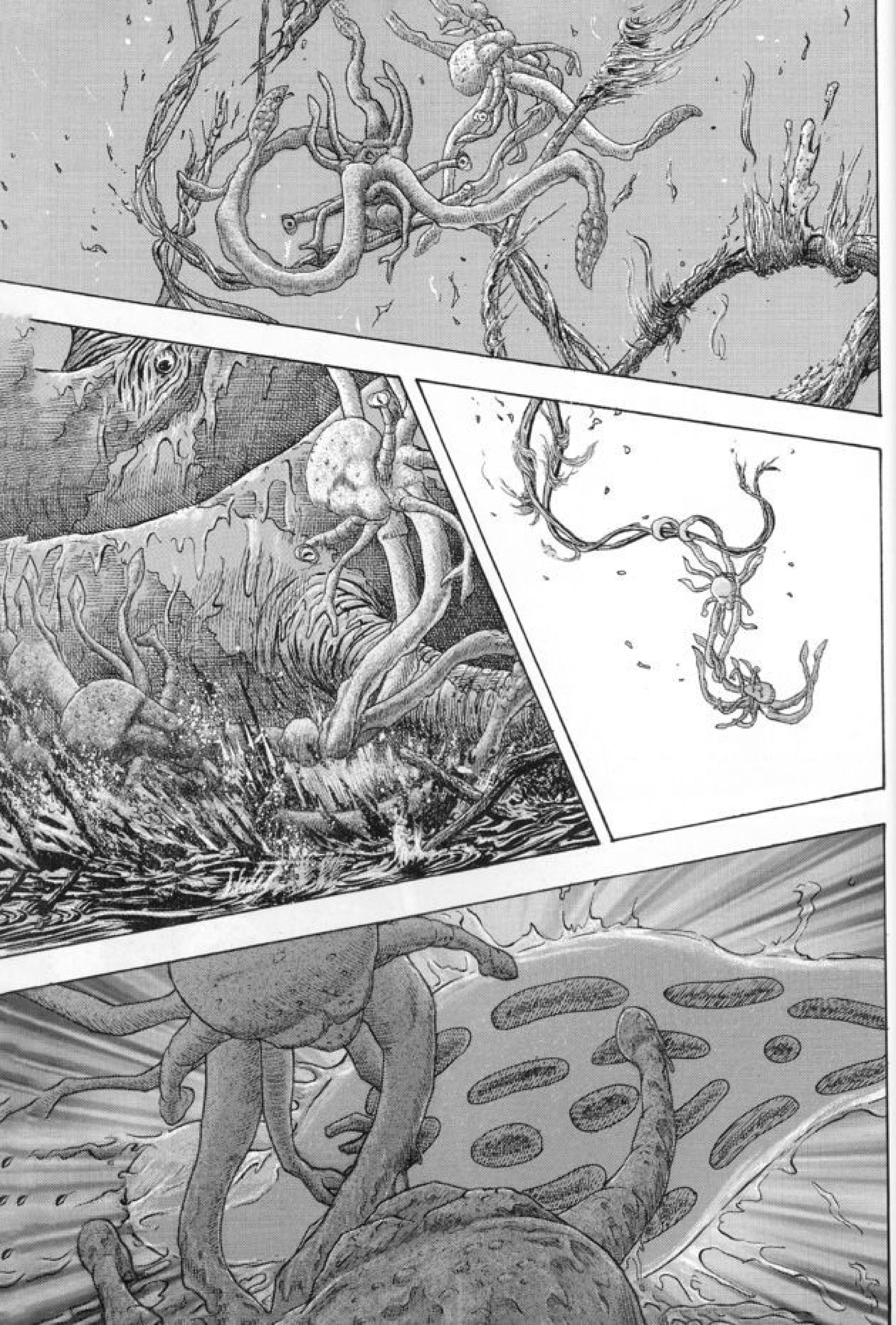

メガスクイドの為に
行動範囲が限られ
飢餓が始まったのだ

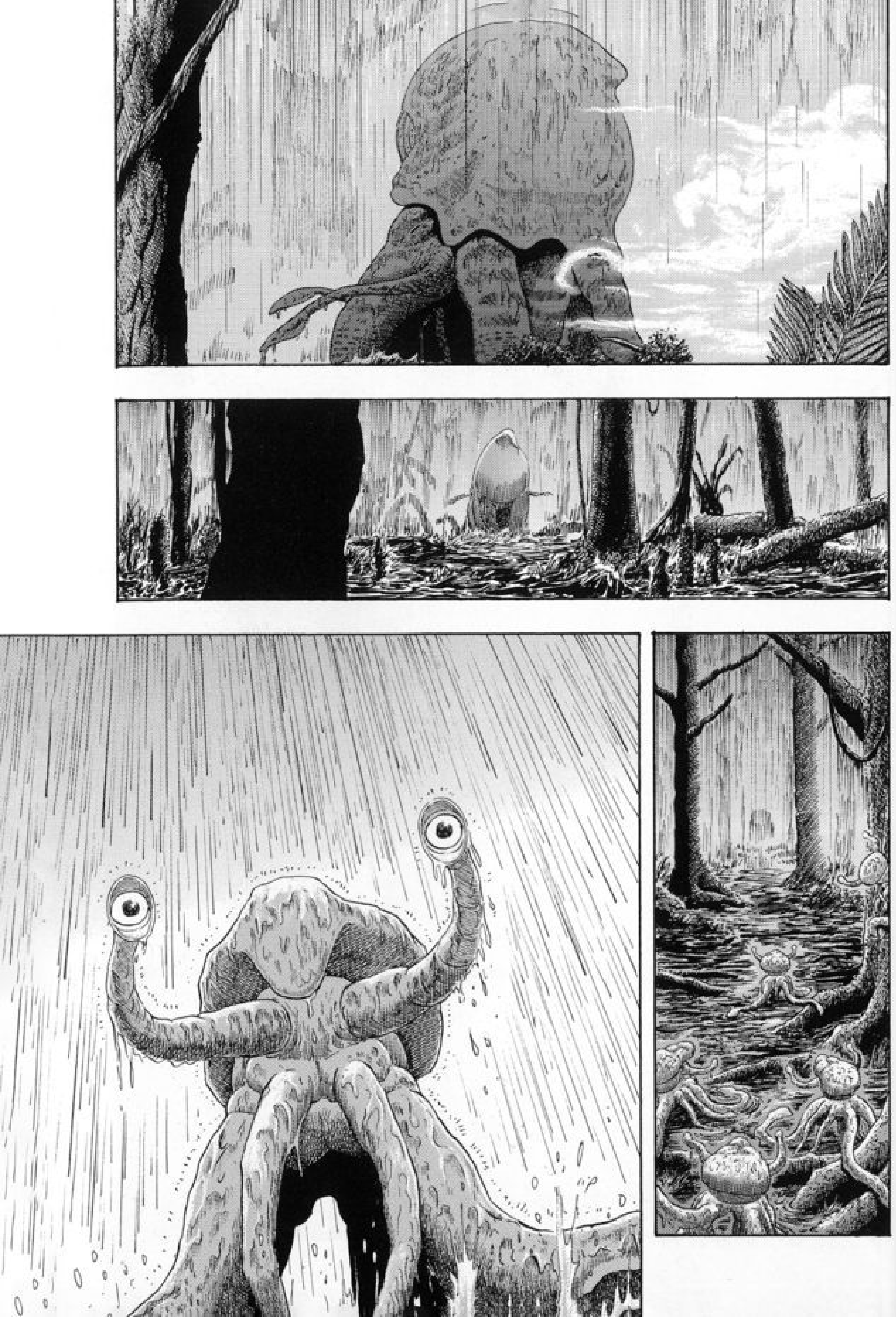
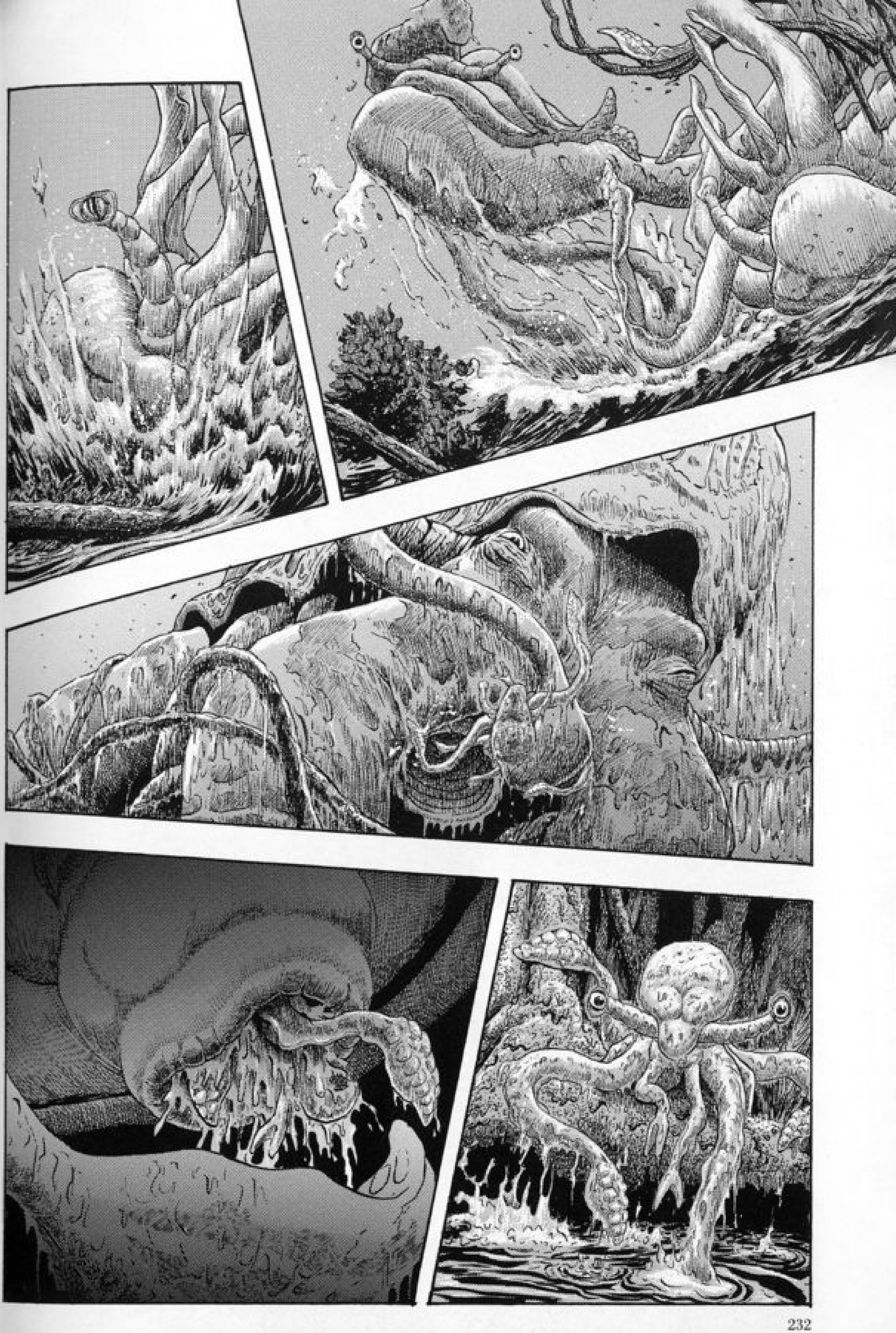

しかしそれよりも
今まで自然の惜しみない
恵みをただ受け
増え続けていた彼等に
とってはストレスの
方が大きかっただろう
なんとかしなければ
自分達が
別の所に移住するか
徹底的に奴を
追い払うかだ



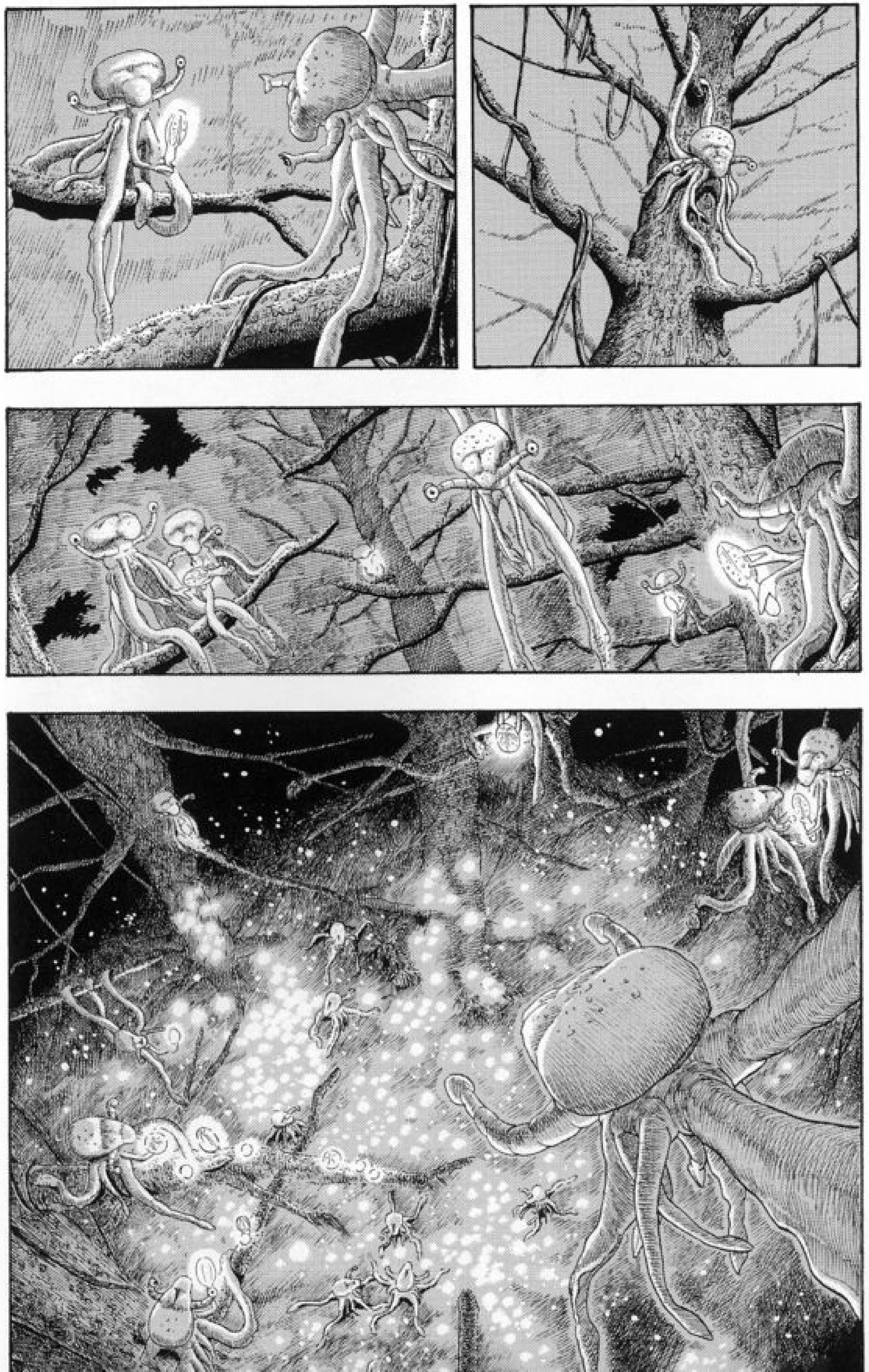



なけなしの食料を使った攻撃だ

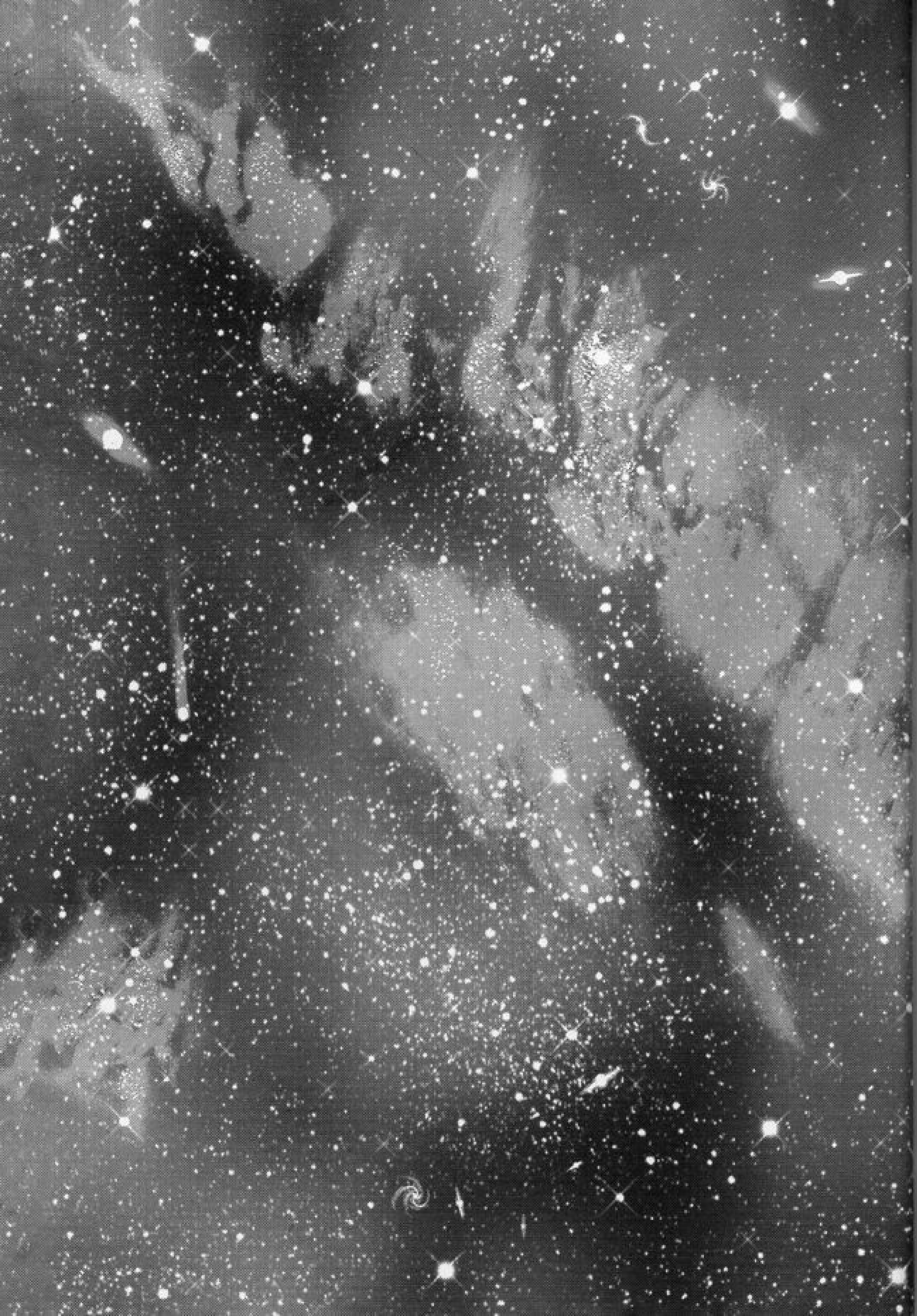


彼は一昼夜ここに佇んだ
しかし雲が晴れ星が覗く事はなかったのである
当たり前だ星空は兄だけの不思議な力なのだ



果たしてこれから彼等はどんな進化をするのだろう
少なくとも人類より暗澹たる知性ではないようである

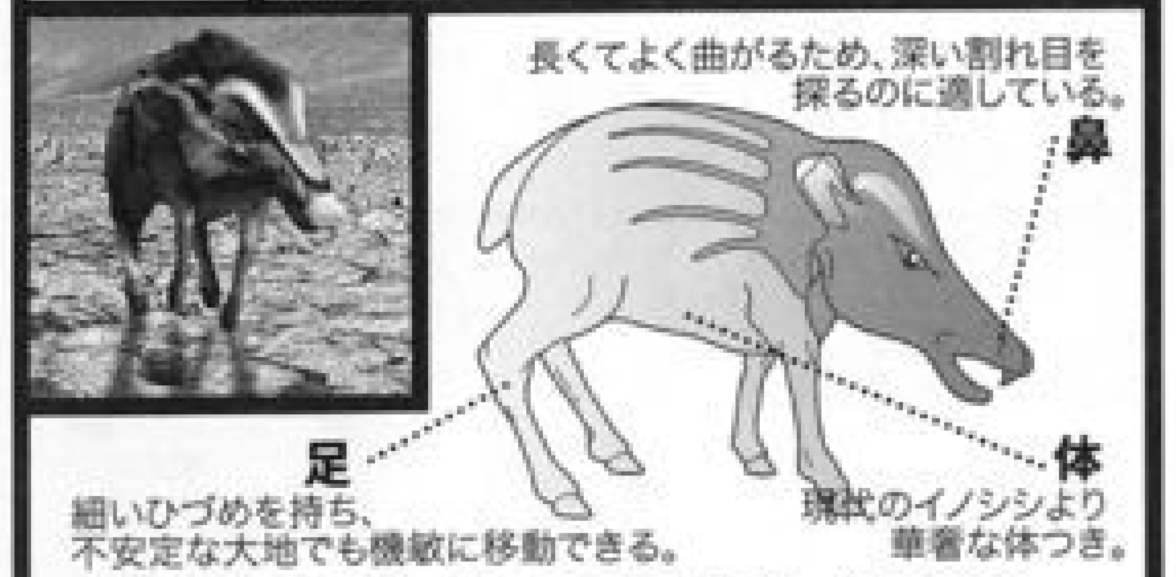


北部森林　END

フューチャー・イズ・ワイルド 未来生物図鑑

theFUTUREisWILD™

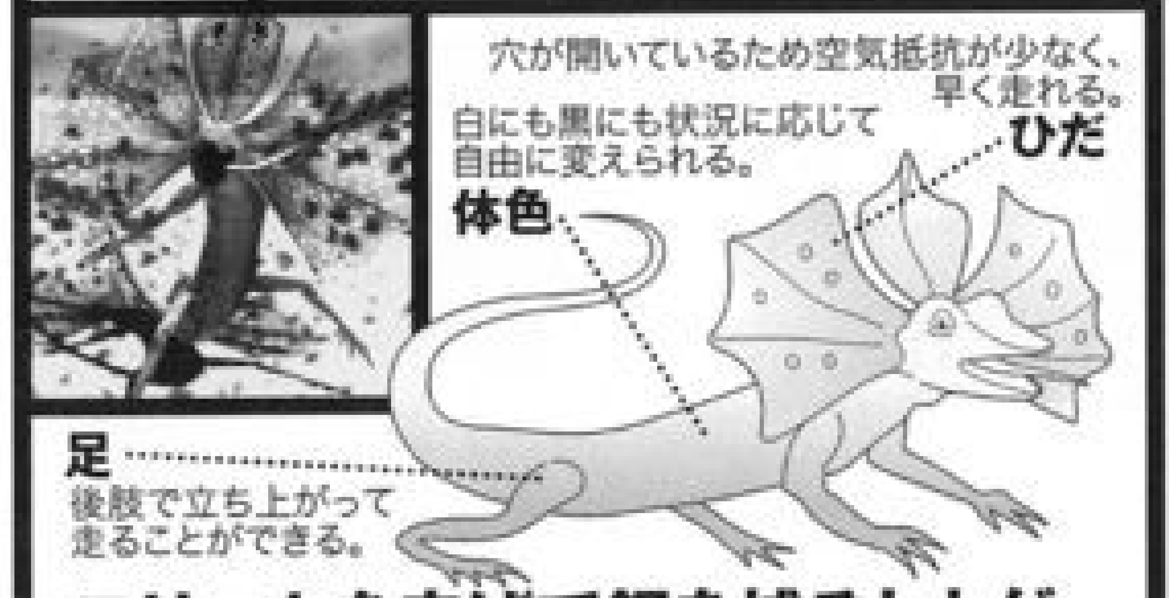
No.05 スクローファ
scrofa



長い鼻で食べものを漁るイノシシ

石灰岩が石畳状に広がるカルスト大地に暮らす、現代のイノシシの子孫。雑食性で環境の変化に強かったため、イノシシは大量絶滅をうまく生き延びることができたのである。岩場を無数に走る深い空隙を長い鼻で探り、植物、腐肉、小動物、卵などを食べる。家族で群れを作るが、雄は成長すると群れを離れるため、群れには雄は子どもしかいない。家族を率いるのは2頭の雌。えさの多い晩春、雌は一回で3〜6匹の子を出産するが、猛禽類やイタチ科の肉食獣に狙われやすく、えさを探すときには2、3匹の大人が見張り役に立つ。

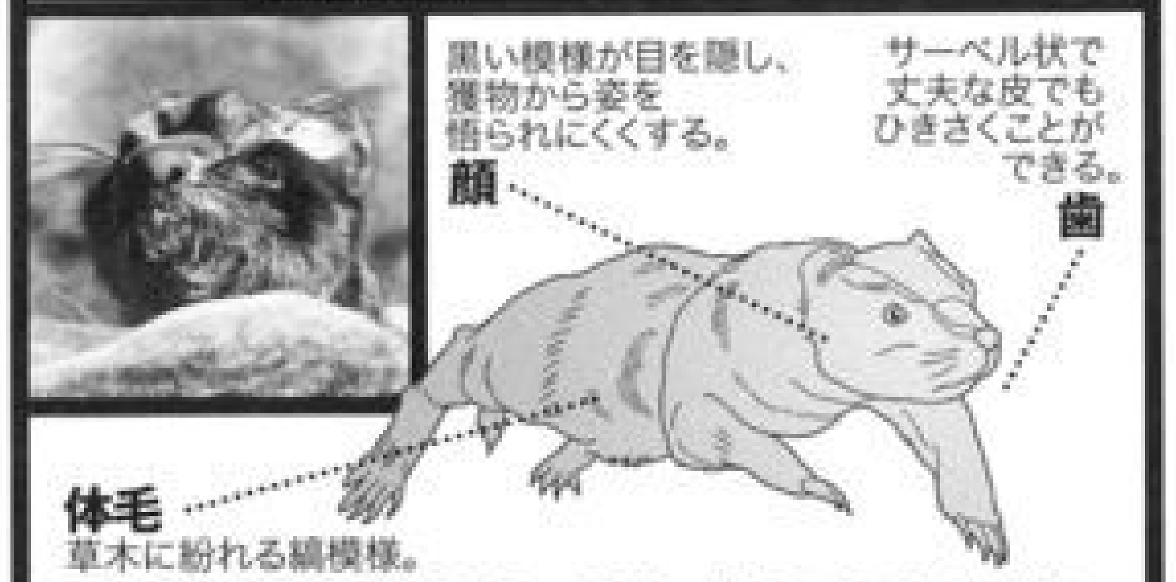
No.04 クリプタイル
cryptile



エリマキを広げて餌を捕るトカゲ

地中海盆地に広がる塩の平原に住むトカゲ。現代のエリマキトカゲのようなひだを首の回りに持つが、威嚇のためだけでなく、獲物をとらえるために利用している。粘液の分泌でねばねばしているひだを広げて、ミギワバエが群れて飛んでいるところを走りぬけると、ひだにハエがくっつく。そのハエを食べる。あたりの水は塩分濃度が高すぎるため飲むことはなく、食べたハエから必要な水分のすべてを得る。体色は周囲の環境に合わせて変えることができる。雄はフリルの色が鮮やかで、その派手さで雌にアピールする。

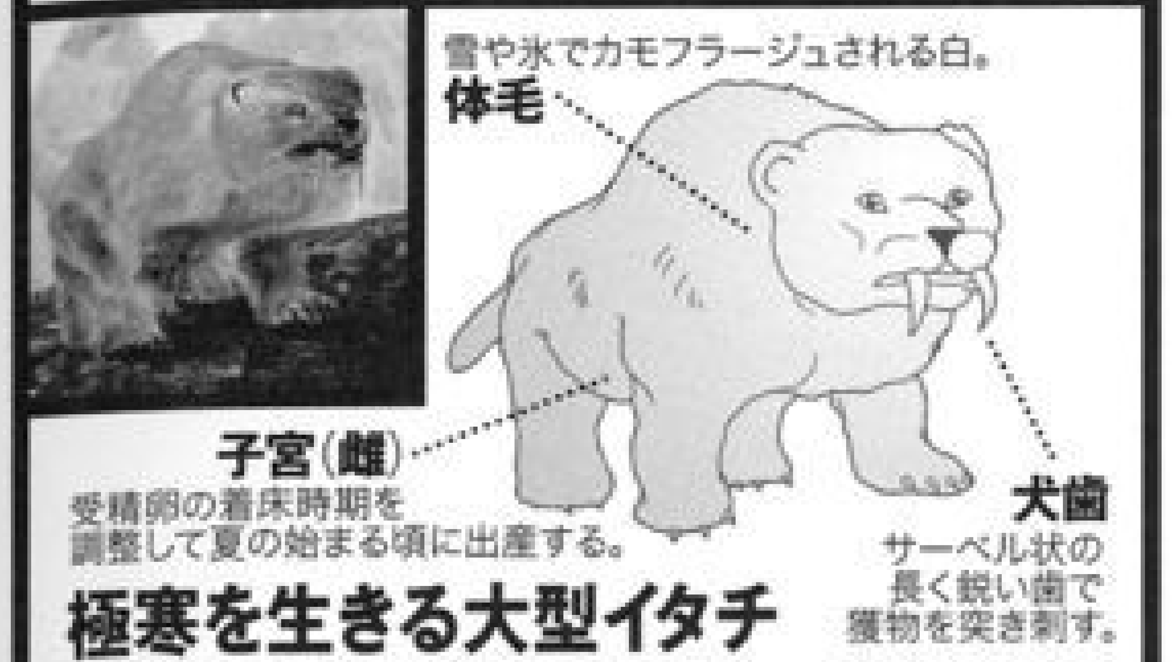
No.06 グライケン
gryken



岩の裂け目をすばやく走る肉食獣

カルスト大地の岩の裂け目に住む、肉食性の哺乳類。イタチ科のテンの子孫だが、樹上生活に適応していたテンと異なり、岩場の生活に適した姿へと進化している。樹上でバランスをとるための長い尾と、枝から枝へ体を持ち上げるための足の筋肉はなくなり、狭い裂け目を敏捷に走り回ることができるような細長い体になった。あごの下まで伸びるサーベル状の犬歯を持ち、地上を歩く小型のイノシシ、スクローファの子どもなどを獲物とする。体が小さいので、スクローファの成獣を襲うことはできない。

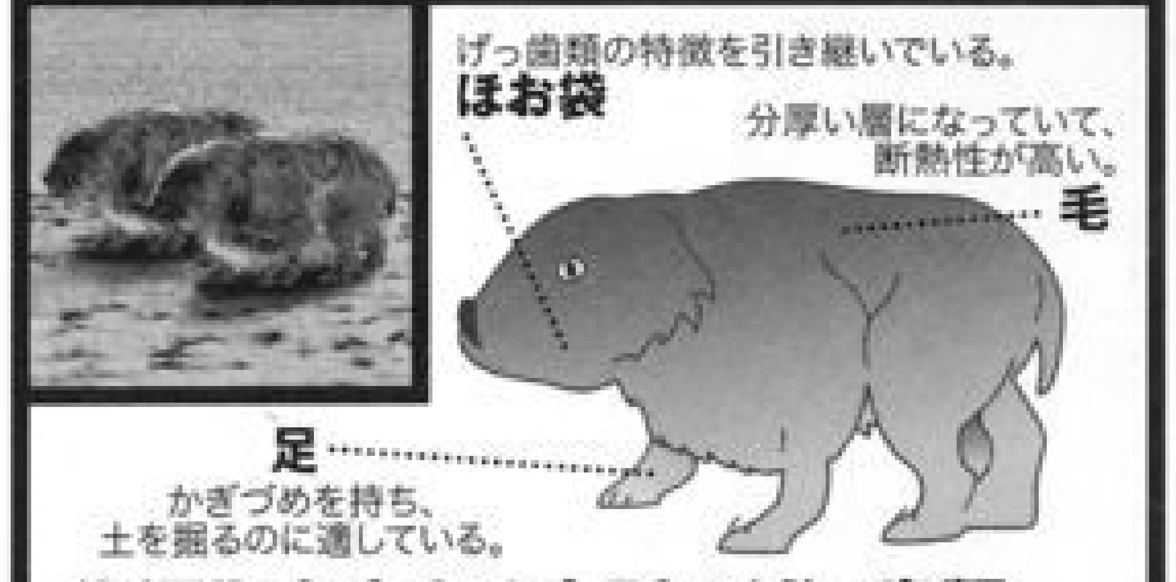
No.02 スノーストーカー
snowstalker



極寒を生きる大型イタチ

ツンドラ帯に生息する大型肉食動物。現代のイタチ科のクズリという動物を祖先に持つが、体はずっと大型化している。主に大型げっ歯類のシャグラットを獲物としているが、ツンドラ地域に大型草食動物の数は多くないため、一度シャグラットの群れを見つけると、何日もその後をつけまわして機会を窺う。現代のサーベルタイガーのような巨大な犬歯で獲物を突き刺して仕留める。祖先のイタチと同様、群れを作らず単独で行動し、十数平方キロにおよぶ広いなわばりを持つ。雌は夏の始まりに一頭の子を産み、暖かい季節に育てる。

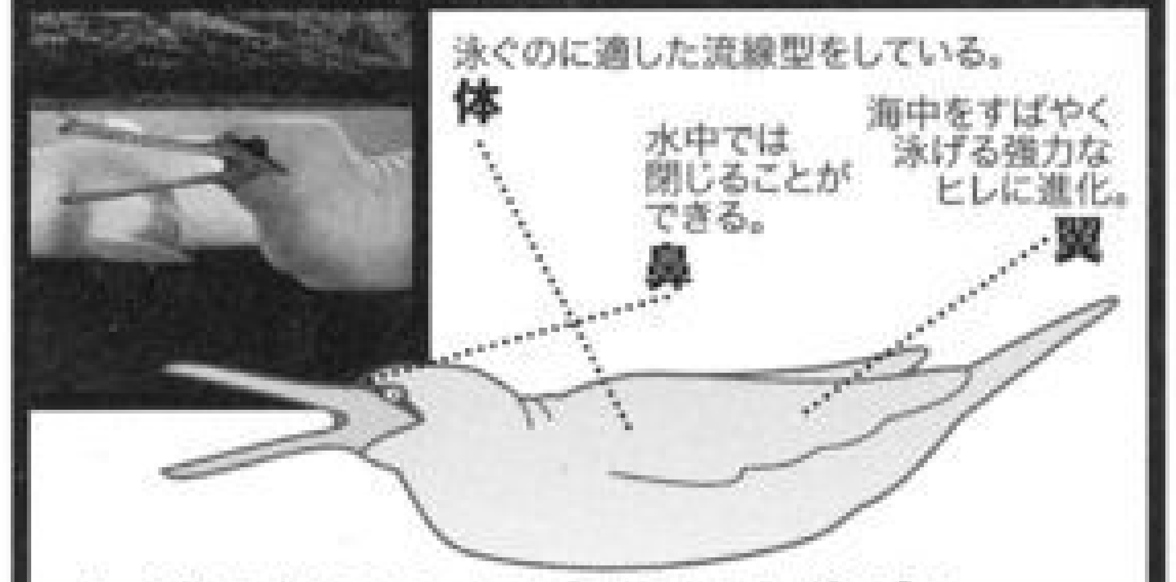
No.01 シャグラット
shagrat



氷河期を生きる大型のげっ歯類

北米ツンドラで最大の哺乳類。現代のヒツジほどの大きさで、長く分厚い体毛を持ち、ジャコウウシのような姿をしている。現代のマーモット（小型の穴居性げっ歯類）が祖先。氷河期が訪れて寒くなった地球環境にあわせて大型化し、体熱が奪われにくい体に進化した。平原を群れで移動し、夏と冬とで餌場を変える。前肢のかぎづめで土を掘り、大きな歯で植物の根をかじりとって食べる。スノーストーカーなどの大型肉食獣に襲われたときは、成獣が外側に顔を向けてぐるりと円陣を組み、その中心に幼い子を囲んで守る。

No.03 ガネットホエール
gannetwhale

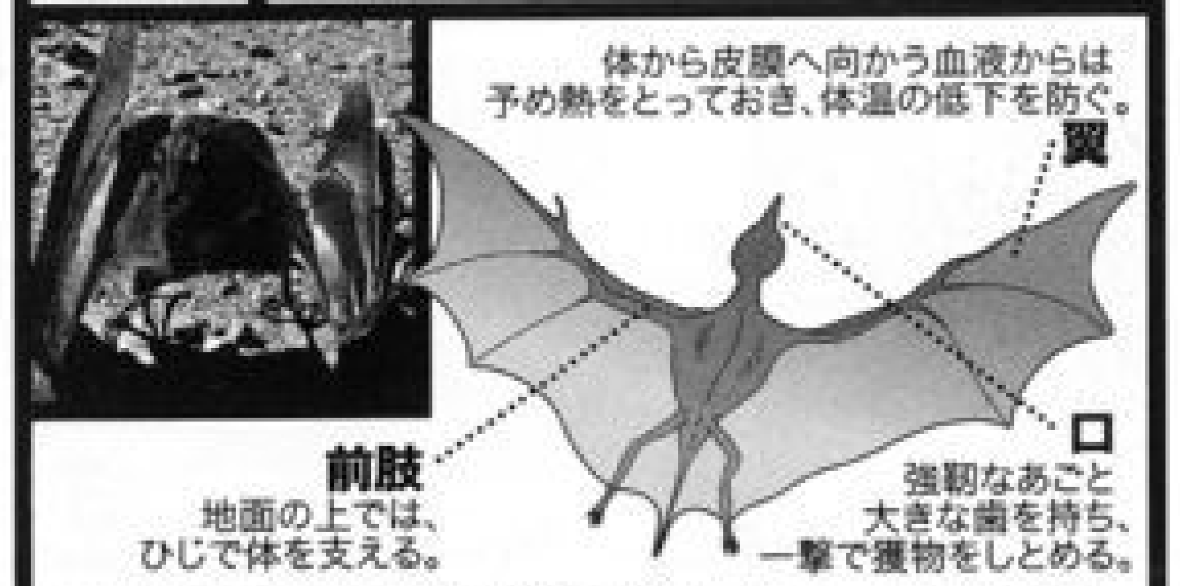


クジラ並みに巨大化した海鳥

アザラシやアシカが絶滅した後、その地位をひきついだ巨大な海鳥。海中を泳ぐこともできた大型の海鳥カツオドリを祖先に持つ。セイウチに似た姿で、大きすぎるためもはや飛ぶことはない。ヒレに進化した翼を使って時速30キロもの速さで海中を泳ぎ、魚を捕らえる。分厚い脂肪層と羽毛が、厳寒の海から体を守っている。大型肉食獣スノーストーカーの襲撃を避けるため、離島に巣を作る。母鳥は産んだ卵を足ではさんで尾の下に置き、自分の体温で温かく保つ。父鳥は漁に出かけて、母鳥や雛の食料を捕って戻ってくる。

No.11 デスグリーナー

deathgleaner



太陽の下で飛び回る巨大コウモリ

翼を広げると1.3mにもなる巨大なコウモリ。現代のコンドルの地位を引き継いで、ロッキー山脈の洞窟や谷間に暮らす。鳥のような長いかぎづめで、スピンクなどの動きの遅い動物をとらえることもあれば、広い範囲を飛び回って見つけた腐肉をあさることも。太陽が地面を温めることで起きる上昇気流に乗って遠くまで飛ぶため、ほかのコウモリと異なり、日中だけ活動する。たくさんの獲物にありついたときはねぐらで仲間とえさを分け合う。食べものが極端に少なくなったときは新陳代謝を下げて休眠する。

No.10 スピンク

spink

モグラのような生活を選んだ鳥

ウズラ類を祖先とする穴居性の鳥の仲間。過酷な気候を生き延びるために地下で暮らす。飛行能力はない。翼は土を掘るための前肢へと姿を変え、関節は左右の前肢を交互に前に出せるように進化した。ひじで這って歩き、地中に埋まった植物の塊茎を食べる。1匹の女王を中心とした集団生活（コロニー）を営む。女王だけが生殖活動に携わり、ほかの個体は、女王とその子を養うために働く、いわば「働きアリ」。広範囲にわたる網の目状のトンネルと部屋を作り、さえずりでコミュニケーションする。地上に出るのは夜のみ。

No.08 カラキラー

carakiller

身長2mを超える飛べない鳥

アマゾン草原最速の巨大な鳥。雑食性で環境の変化に強かった、ハヤブサの一種であるカラカラを祖先に持つ。大型化して捕食者がいないため、ダチョウなどと同様に飛行能力は手放してしまった。集団で狩りをする。視点が高いので遠くまで見渡すことができ、獲物を見つけると、飾り羽を使って仲間と連絡を取り合い、すばやく走りよって、前脚の長いかぎづめで捕らえる。しばしば起こる草原の大火事の際には、逃げ惑う動物を火の際で待ち伏せて襲ったり、火の通り過ぎた後を歩いて、黒こげになった肉をついばむ。

No.07 バブカリ

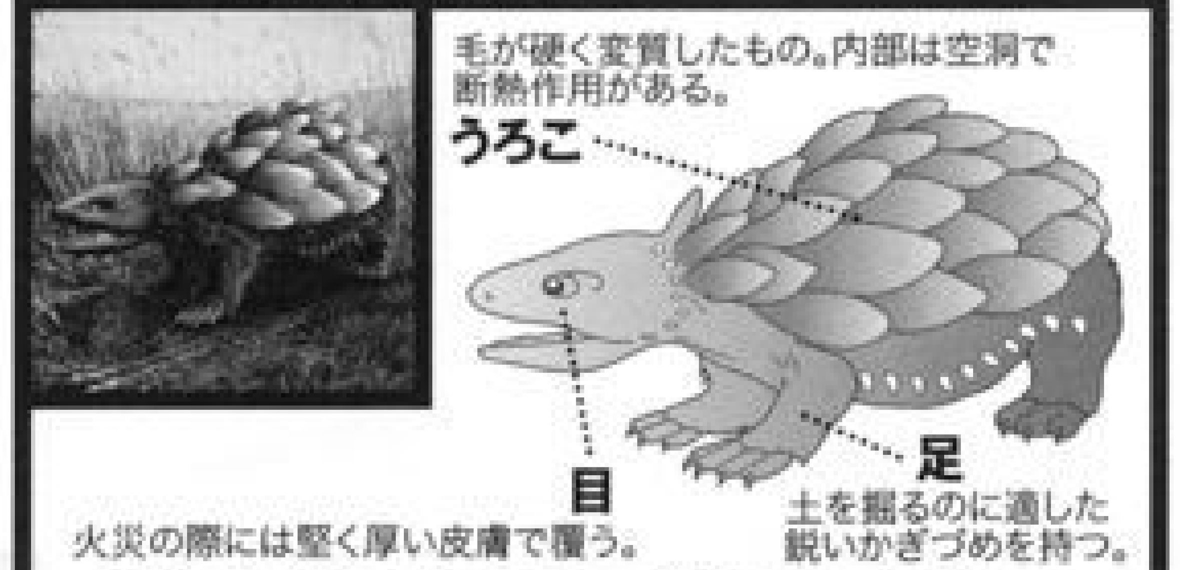
babookari

樹から降りた地上最後のサル

地球に生き残った最後の霊長類。現代のウアカリ（南米のオマキザル）を祖先に持つ。祖先が雑食性だったために環境の変化に強く、アマゾンの密林消失後、草原の生活に適応した。知能も大きく発達しており、器用な指を使って草で球形の籠を編み、川の中に沈めて魚がかかるのを待つほど。数十頭の群れを作って暮らし、えさ探しも敵の発見も仲間で協力しあう。祖先にはなかった長い尾を持ち、仲間とコミュニケートする。尾の先を草の上に出して揺らすことで仲間へ合図を送るが、草に紛れて他の動物には気づかれない。

No.09 ラトルバック

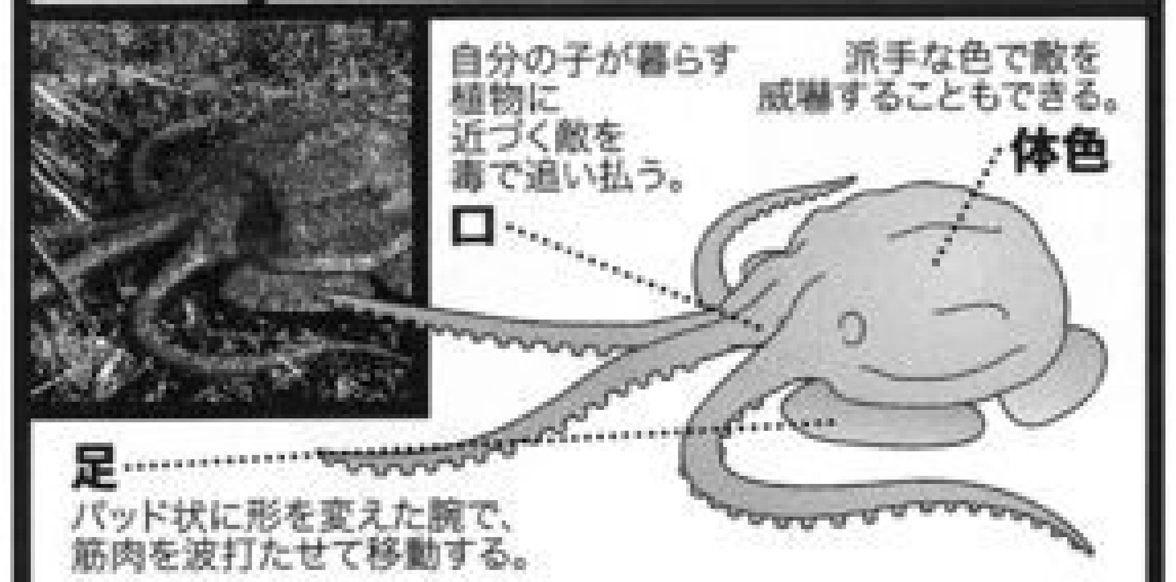
rattleback



火災を鎧でやりすごすげっ歯類

アマゾン草原に住む、現代のカワウソほどの大きさのげっ歯類。アルマジロに似ているが、南米の森林に住んでいた穴居性の大型げっ歯類パカの子孫。この草原では火災がたびたび起こるが、その際はうろこをぴったりと閉じて、あたりの土のなかに体を埋める。敵に襲われたときも同様にして身を守る。雑食で、植物のふくらんだ地下茎や火災で死んだ動物、飛ばない大型鳥カラキラーの卵などを食べる。北米大陸に渡って寒冷な砂漠へ適応した別の種もいる。そちらの種は草食性で、体がより大きく、うろこはそれほど重厚ではない。

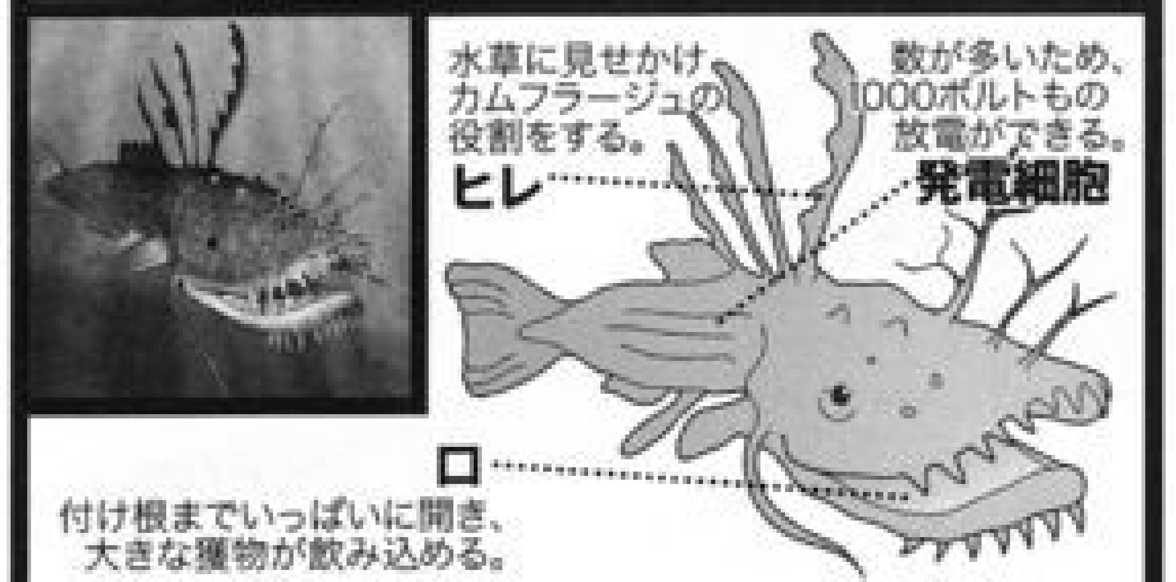
No.16 スワンパス
swampus



陸上で子育てをするタコ

タコの子孫。呼吸は水中でするが、体の組織や血液に酸素を蓄えることができ、4日間は連続して陸に上がっていることができる。陸上では、長く伸びた4本の腕とパッド状の足に進化した残り4本の腕で移動する。体色を自在に変えてカムフラージュし、大型の昆虫や小型の脊椎動物を捕らえて食べる。交尾は水中で行うが、卵は陸上の花瓶状の植物の根元にできる水溜りのなかに産み落とす。母親が自分の尿でその水溜りの水質を整え、そこで子どもを育てる。母親が呼吸のために水中に戻るときには、別の母親が代わりに子守りする。

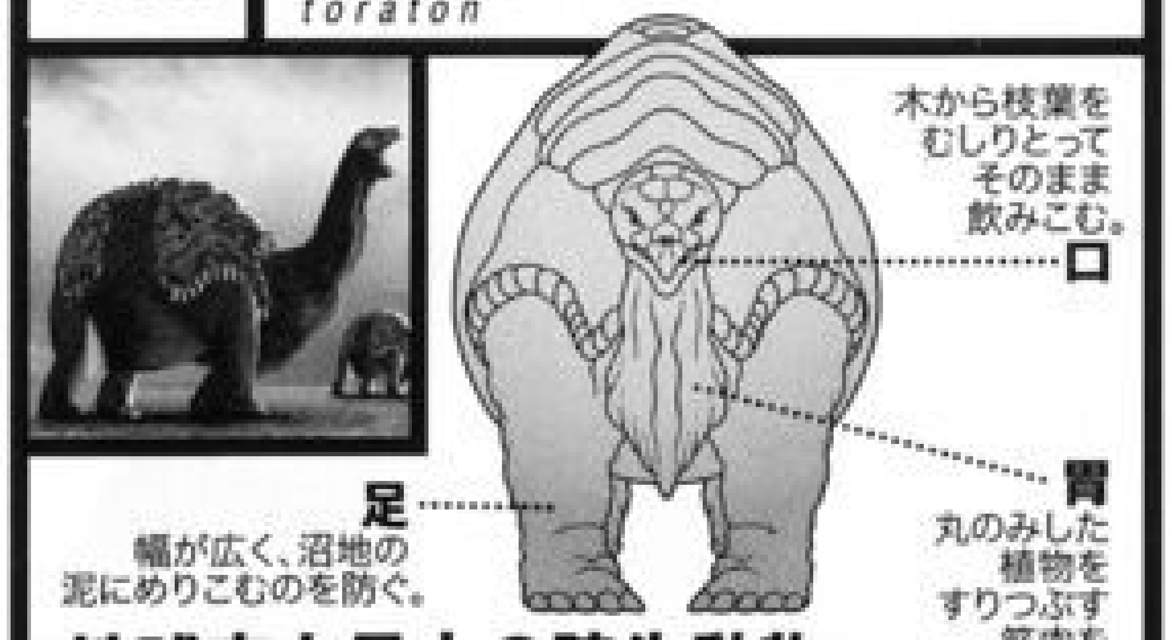
No.15 ルークフィッシュ
lurkfish



1000ボルトの電流で狩りをする魚

ベンガル沼地の沼底に住む体長4mの巨大魚。朽ちた丸太のような外見で、周りの環境に紛れて目立たない。変温動物のため頻繁に食べる必要がなく、沼底にじっと横たわって何日も獲物を待ち伏せ、気づかずにそばを通った魚などをすばやく捕らえる。にごった沼は見通しがきかないが、水中のわずかな動きも感じ取るひげを持つ。現代のデンキナマズのように、体側に発電細胞と呼ばれる特殊な筋肉細胞を持ち、大きな獲物を強力な電気ショックで麻痺させ、巨大な口と鋭い歯で沼の中にひきずりこんで食べる。

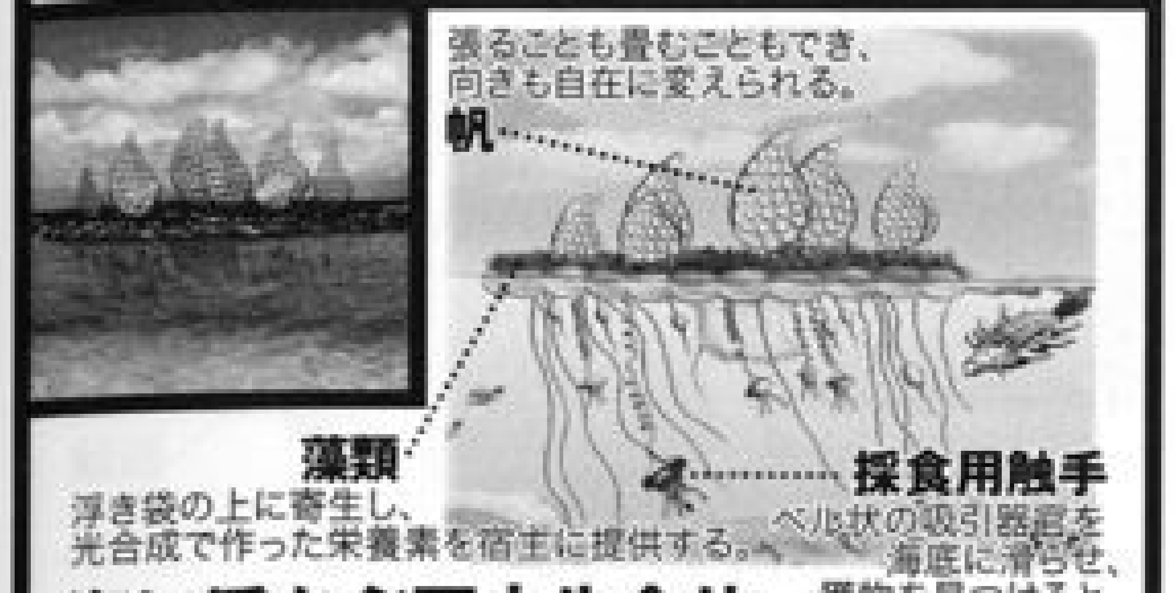
No.17 トラトン
toraton



地球史上最大の陸生動物

古代のリクガメを祖先にもつ、巨大なカメ。体高は7メートル、体重は現代のゾウの24倍、120トンにおよぶ。植物の豊かな温かい沼地に暮らし、ほとんど一日中を採食に費やす。一日に食べる植物の量は約600キロ。体が大きく、捕食される心配もないので、身を守るための甲羅は不要だが、細い肋骨や脊柱だけではこの巨体を支えきれないため、ところどころ残った甲羅が体を外側から支えている。卵の殻は非常に硬く、母親がくちばしで殻にひびを入れて孵化させる。子どもは5年ものあいだ、両親が世話をする。健康な個体の寿命は約120歳。

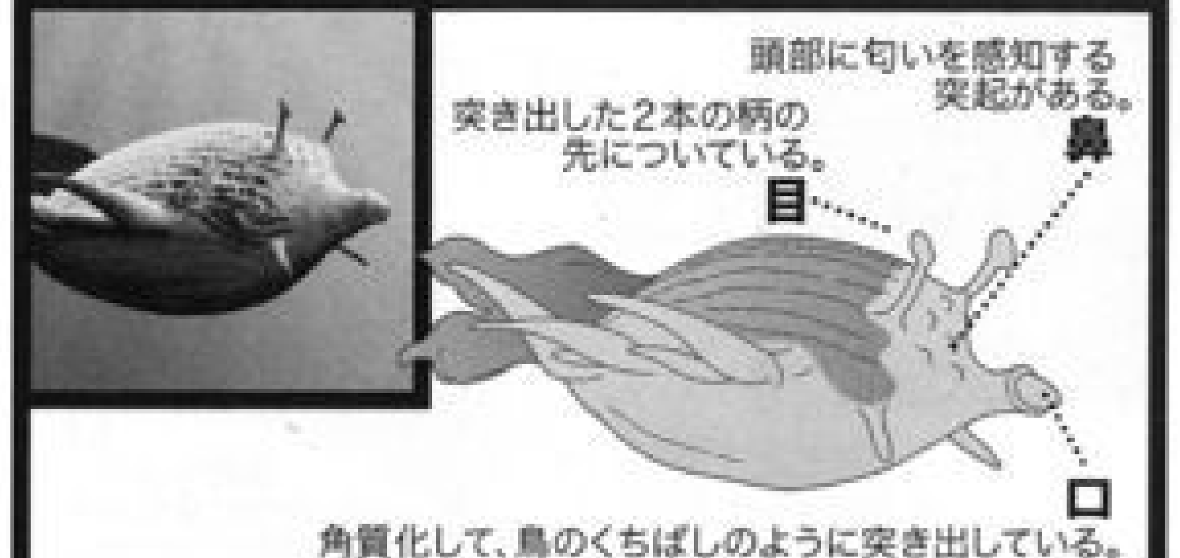
No.13 オーシャンファントム
ocean phantom



海に浮かぶ巨大生命体

体長10m、幅4mにもなる、クジラ並みの巨大クラゲ。カツオノエボシと呼ばれるクラゲの子孫。何千もの小さな個体が集まって一つの生命体を作っている。それぞれの個体が採食や移動、防御、センサーなどの異なる役割を担い、高度に発達した神経系がこの複雑な分業を支える。体の中心となる巨大浮き袋には水の通る管を張り巡らせた帆を備え、ヨットのように風を切って進むことも、無風の際にはジェット水流で進むこともできる。嵐で体がバラバラにちぎれても、その一片一片がもとになって新たに再生する。

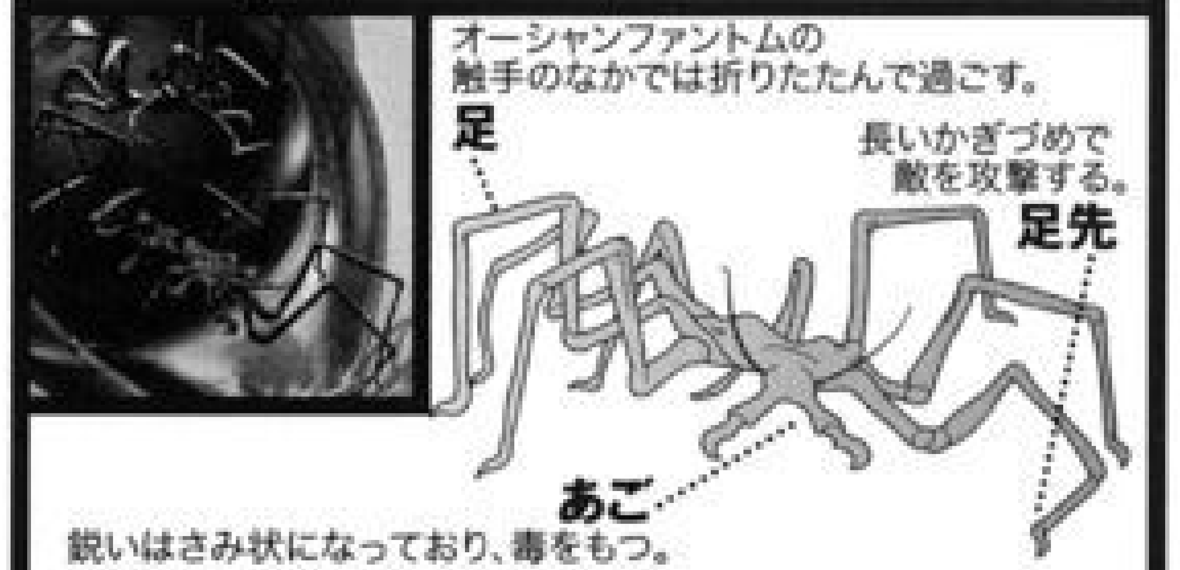
No.12 リーフグライダー
reef glider



リーフを泳ぎまわる大型ウミウシ

「海のなめくじ」と呼ばれたウミウシの子孫。もとは体長数cm程度だったが、現代のアザラシほどに大型化した。3対のひれを発達させ、水中を自由に泳げる。丸みを帯びた滴形の体で、体色は祖先同様に鮮やか。えらは長いリボン状で体の外に露出しており、後ろにたなびかせて泳ぐ。魚のような浮き袋はないが、体液が海水より軽いので水中で浮くことができる。子どもは紅藻が作ったリーフ（礁）で、紅藻の蜜（タンパク質と炭水化物）を食べて育つ。成長すると外海に出て、肉食となる。繁殖期にはリーフへ戻ってくる。

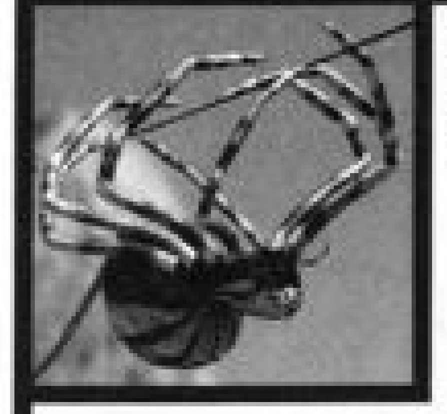
No.14 スピンドルトルーパー
spindletrooper



巨大クラゲが雇った兵隊グモ

ウミグモの子孫。10cmほどであった現代のウミグモより大型化しており、足を開くと30cmほどになる。もともとはリーフで暮らしていたが、オーシャンファントムとの共生関係を発達させた。ふだんはファントムのベル状の触手の内部に集団で暮らし、外敵に襲われることはない。空腹になると、触手の内壁をひっかく。するとファントムの本体から食べ物が流れ落ちてくる。宿主のファントムがおとなのリーフグライダーなどの敵に襲われたときには、触手のなかからいっせいに出てきて、かぎづめと大きなあごで敵を撃退する。

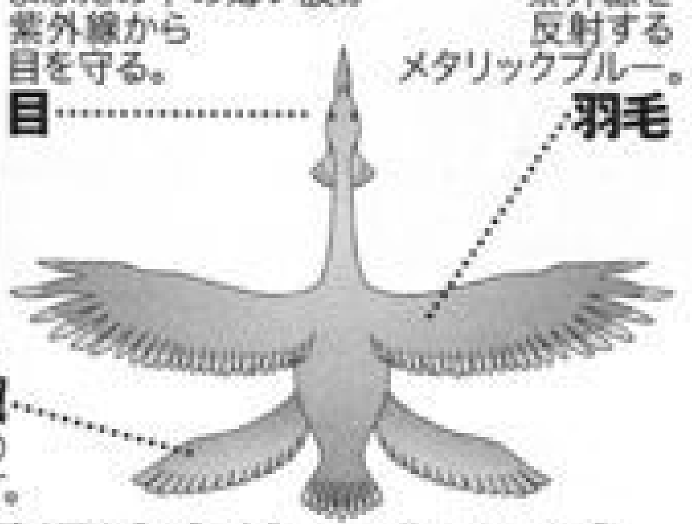
No.23 シルバースパイダー
silver spider



幅30mもの巨大な巣をかけるクモ

女王グモを頂点として集団で共同生活を営むクモ。体の小さい若いクモが、風に流されて飛んできた綿毛の種子につかまって、糸を吐きながら長い峡谷を渡る。それを足場にしてほかのクモが24kmもの糸を使い、幅30mにおよぶ巨大な巣を作る。風に吹き流されて網にかかった種子などを食料係が集める。クモたちの食料は家畜として養っている小型げっ歯類のポグル。種子はポグルの餌として集められている。女王グモは肉を食べるだけでなく、妊娠した雌のポグルの血を吸う。雌の血中ホルモンが女王の産卵を促すためである。

No.22 グレートブルーウインドランナー
great blue windrunner



2対の翼で飛行法を使い分ける鳥

ツルの子孫。標高10000mの山々が囲む高原地帯、グレートプラトーに住む大型の鳥。ほとんどの時間を空を飛んで過ごす。遠くまで飛ぶのに適した細長く大きな翼を持ち、上昇気流を利用して高速で滑空する。長時間の休息は不要で、風に流されながら数分間の睡眠をとる。クモなどのえさをとらえるために急降下するときには、後方にある肢を横に広げ、もう1対の翼として利用する。この前後幅のある小さな翼が、低速飛行時の機動性を高める。捕食者が容易に近づけない高い場所に巣を作って子どもを育てる。

No.24 ポグル
poggle

家畜となった地球最後の哺乳類

現代のハムスターに近い、小型のげっ歯類。1億年後の地上に生き残った最後の哺乳類である。グレートプラトーの峡谷に暮らし、岩の割れ目のなかにある巣穴で種子を食べて一生を過ごす。繁殖力は非常に強く、たくさんの子どもを産む。種子はシルバースパイダーが集めてきてふんだんに供給するため、自分で食物を探したり、移動したりする必要はない。養い主であるクモは時おり、太った個体を選んで、麻痺性の毒を刺し込む。毒液に含まれる酵素によって体の組織の分解が始まり、そのままクモに食べられてしまう。

No.19 スピットファイアバード
spitfire bird

襲ってくる敵に毒を吹きかける鳥

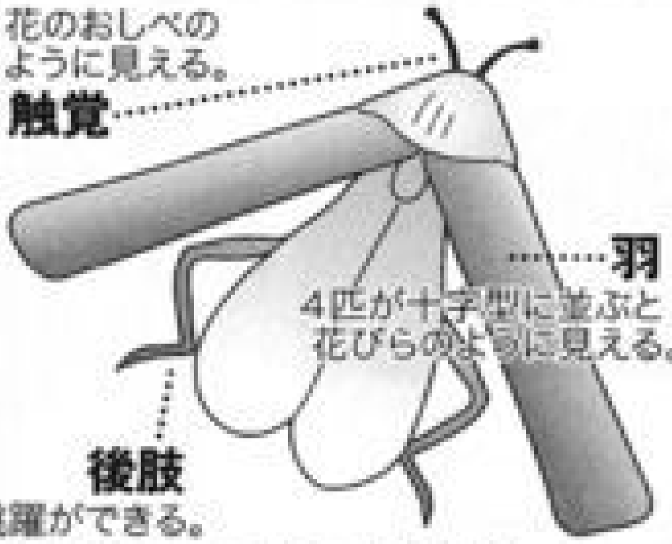
南極森林に住むフラッターバードの一種。ローチカッターより一回り大きく、オレンジ色の羽を持つ。昆虫食。ホバリングしながらスピットファイアツリーの花から化学物質を集め、のどにある袋に蓄える。同時に、花の受粉にも貢献する。敵に襲われると、自身の体内で分泌した酵素と花から集めた物質とを混ぜ合わせ、熱くて強力な腐食性の毒液に換え、鼻の穴から吹きかけて撃退する。別種のスピットファイアバードモドキは毒を持たないが、外見をよく似せることで、他の動物から襲撃を受ける危険を減らしている。

No.18 ローチカッター
roachcutter

ジャングルを飛び回る極彩色の鳥

ホバリングができるフラッターバード類の一種で、現代のスズメほどの小さな鳥。祖先は現代の南極周辺に住んでいた大型の海鳥ミズナギドリ。暖かい気候の森林生活に適応して体が小型化していった。鮮やかな紫色の体に、深い青とエメラルドグリーンで色分けされた翼を持つ。くちばしが非常に丈夫で、硬い外皮を持った昆虫も砕いて食べる。翼は左右幅が短く前後幅が長いため、うっそうと茂った森の中でも急な方向転換が可能。捕食者が近づくと、弾丸のように木々の間を抜けてすばやく飛び去る。

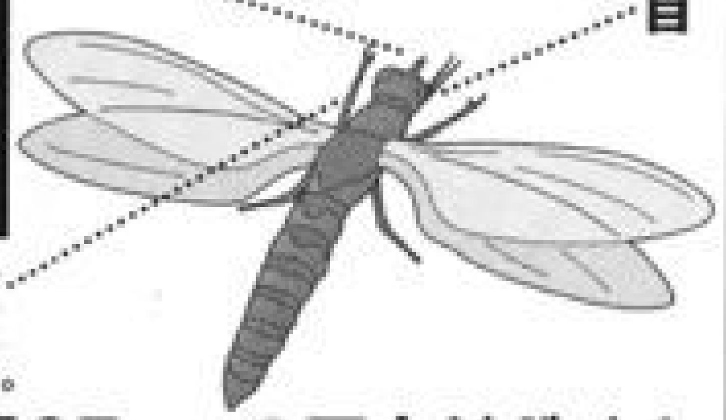
No.21 スピットファイアビートル
spitfire beetle



4匹1組で花に化けて鳥を襲う虫

花に擬態して狩りをする大型の甲虫。4匹が頭を寄せて十字に陣形を組み、オレンジと黄の羽を広げてスピットファイアツリーの花に見せかけ、スピットファイアバードをおびき寄せる。本物の花と間違えた鳥が近づくと瞬時に飛びかかって捕らえ、強力なあごと前肢のかぎづめで鳥の体を砕く。獲物は4匹で分け合う。花の季節が終わると繁殖のためにそれぞれ別行動を始める。交尾後、雄はすぐに死に、雌はスピットファイアツリーの樹皮に卵を4つずつ産んでまわる。卵から孵った4匹は、チームを形成して花の擬態を始める。

No.20 ファルコンフライ
falconfly



鳥を襲う体長35cmの巨大ジガバチ

体長2cmほどだった現代のジガバチの子孫。従来、昆虫は肺を持たないため大型化できなかったが、この時代に地球の大気中の酸素濃度が高くなり、地球史上最大級の昆虫が誕生した。現代の猛禽類ほどの大きさで、肉食。主にフラッターバードを襲う。一番前と一番後ろの2対の肢にあるかぎづめでホバリングしている鳥をがっちりとつかみ、真ん中の1対の肢をそろえて銛のように突き刺す。内臓を貫かれた鳥とともに地面に落ち、地上で獲物をバラバラに引き裂いて食べる。残りは巣穴の子どもに運ぶ。3～4匹の子どもを1匹ずつ別の巣穴で育てる。